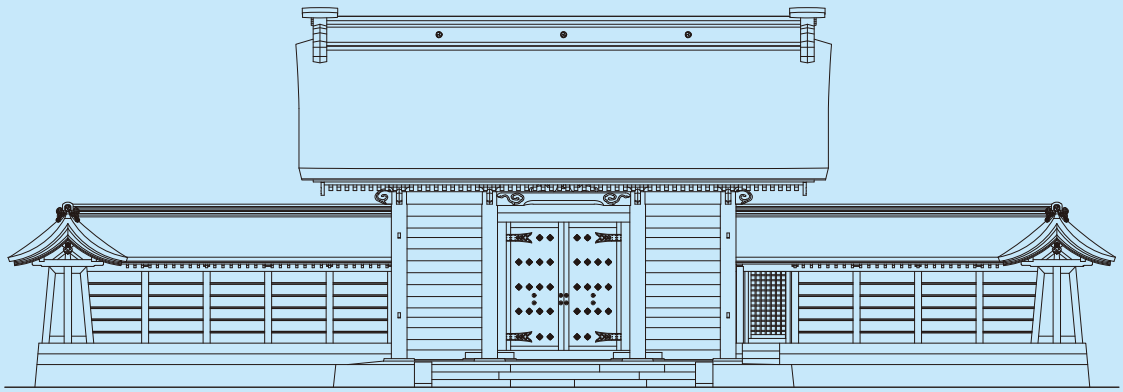
公益財団法人

和歌山県文化財センター年報

埋蔵文化財発掘調査と文化財建造物保存修理の記録

2014



1　平井遺跡　弥生時代竪穴建物（南西から）

2　平井遺跡　横穴式石室（南西から）

巻頭写真２

３　木津遺跡 １区 全景（東から）

４　木津遺跡 ２区 石組遺構（東から）

5　丹生都比売神社　本殿　竣工

6　琴ノ浦温山荘　浜座敷　竣工

巻頭写真４

７　法音寺　本堂　竣工

８　熊野本宮大社　神門・築地塀　竣工

目　次

平成 26（2014）年度　受託業務一覧 …… 2
平成 26（2014）年度　受託業務所在地図 …… 3

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物整理

川辺遺跡の発掘調査…… 4
岩橋千塚古墳群の発掘調査支援…… 5
神前遺跡の発掘調査…… 6
平井遺跡（第３次）の発掘調査…… 7
平井遺跡（第４次）の発掘調査…… 8
根来寺遺跡の発掘調査…… 9
出塔の水道の発掘調査……10
木津遺跡の発掘調査……11
立野遺跡の発掘調査及び整理業務……12
立野遺跡の発掘調査……13
和田遺跡の出土遺物等整理……14
井辺遺跡及び神前遺跡の第３次出土遺物等整理……15
和歌山城跡（地方・家庭・簡易裁判所地点）
出土遺物等整理……16
和歌山城跡の第１次出土遺物等整理……17
近畿自動車道紀勢線事業に伴う第２次出土遺物等整理　18

文化財建造物の保存修理技術指導

重要文化財　広八幡神社本殿ほか５棟、
県指定文化財　広八幡神社舞殿の保存修理……19
重要文化財　琴ノ浦温山荘浜座敷ほか２棟の保存修理…20
重要文化財　法音寺本堂の保存修理……22
重要文化財　丹生都比売神社本殿の保存修理……23
重要文化財　旧西村家住宅の耐震診断……23
国名勝　玉津島神社本殿の保存修理……24
国史跡　熊野参詣道史跡等保存整備技術指導
～継桜王子跡社殿の保存修理～……24
国史跡　熊野三山史跡等保存整備
～熊野本宮大社神門ほか４棟の保存修理～……25
国史跡　高野山金剛峯寺伽藍中門再建工事……25
国登録文化財　旧橋本本陣池永家住宅の保存修理…26
県指定文化財　総持寺総門・鐘楼の保存修理……26

関連研究・資料紹介

和歌山城三の丸で出土した桑山家の瓦……27
重要文化財琴ノ浦温山荘浜座敷保存修理工事
　－大正期のベニヤ合板とその補修－　……28
重要文化財　法音寺本堂　保存修理工事
　－史料紹介と考察－……30

普及活動

平成 26（2014）年度の普及啓発事業　……32

センター概要

平成 26（2014）年度概要 ……36

巻 頭 写 真

1　平井遺跡　弥生時代竪穴建物（南西から）
2　平井遺跡　横穴式石室（南西から）
3　木津遺跡　１区全景（東から）
4　木津遺跡　２区石組遺構（東から）
5　丹生都比売神社　本殿　竣工
6　琴ノ浦温山荘　浜座敷　竣工
7　法音寺　本堂　竣工
8　熊野本宮大社　神門・築地塀　竣工

例　言

1　本書は、公益財団法人和歌山県文化財センターが平成 26 年度受託業務として行った埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物等整理業務、文化財建造物の保存修理技術指導業務、および普及活動の成果をまとめたものである。
2　掲載した地図は、和歌山県教育委員会が発行する『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』2004 ～ 2006 年度（地図は国土地理院発行の数値地図 1：25,000 の複製）および数値地図 1：25,000 の複製を一部加筆し引用した。また、各自治体の発行する 1：2,500 都市計画基図を一部加筆し引用したほか、電子国土（http://cyberjapan.jp）提供図の複製を用いた。
3　掲載写真・図面は、基本的に調査および整理中に撮影・作成したものであり、出典が異なる場合は個別に記した。また、本文中の所見は、調査・整理作業中のものであり、今後の作業の進展により変更する可能性がある。
4　掲載した座標値は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）による。
5　原稿執筆は職員が分担して行い、文末に執筆者名を記した。編集・組版は、川崎雅史・下津健太朗が担当した。

平成 26（2014）年度　公益財団法人和歌山県文化財センター受託業務一覧

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物整理業務

	受託業務の名称	所在地	契約期間	調査面積	委託機関等
1	都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う川辺遺跡発掘調査業務	和歌山市川辺・藤田	2014.10.01 ～ 2015.03.31	820㎡	和歌山県
2	岩橋千塚古墳群追加指定に係る大谷山 22 号墳及び天王塚山古墳発掘調査支援業務	和歌山市下和佐・西・鳴神	2015.01.05 ～ 2015.03.30	52㎡	和歌山県
3	秋月海南線道路改良工事に伴う神前遺跡発掘調査業務	和歌山市神前	2014.03.20 ～ 2014.08.20	325㎡	和歌山県
4	一般国道 26 号第二阪和国道平井遺跡（第３次）発掘調査業務	和歌山市平井	2014.03.25 ～ 2014.09.10	673㎡	国土交通省（近畿地方整備局）
5	一般国道 26 号第二阪和国道平井遺跡（第４次）発掘調査業務	和歌山市平井	2014.03.20 ～ 2015.01.30	1685㎡	国土交通省（近畿地方整備局）
6	根来寺周辺観光促進事業拠点整備発掘調査業務	岩出市根来	2015.01.06 ～ 2015.03.31	899㎡	岩出市
7	山田川砂防工事に伴う出塔の水道発掘調査業務	橋本市出塔	2013.12.27 ～ 2014.10.29	149㎡	和歌山県
8	国道 424 号道路改良事業に伴う木津遺跡発掘調査業務	海南市木津	2014.07.30 ～ 2015.03.20	2389㎡	和歌山県
9	近畿自動車道紀勢線事業に伴う立野遺跡第２次発掘調査業務	西牟婁郡すさみ町周参見	2014.03.12 ～ 2014.10.13	2840㎡	国土交通省（近畿地方整備局）
10	すさみ町公共施設移転事業に伴う立野遺跡発掘調査等業務	西牟婁郡すさみ町周参見	2014.03.20 ～ 2015.01.30	6079㎡	すさみ町
11	秋月海南線道路改良工事に伴う出土遺物等整理業務（和田遺跡）	和歌山市和田	2014.06.20 ～ 2015.03.31	—	和歌山県
12	都市計画道路松島本渡線（神前南）道路改良工事に伴う井辺遺跡及び神前遺跡第３次出土遺物等整理業務	和歌山市井辺・神前	2014.04.25 ～ 2014.11.01	—	和歌山県
13	和歌山地家簡裁庁舎建設に伴う出土遺物等整理業務	和歌山市二番丁	2014.04.02 ～ 2015.03.31	—	最高裁判所
14	和歌山地方合同庁舎新築に伴う和歌山城跡出土遺物等（第１期）整理業務	和歌山市二番丁	2014.08.19 ～ 2015.03.25	—	国土交通省（近畿地方整備局）
15	近畿自動車道紀勢線事業に伴う第２次出土遺物等整理業務	田辺市秋津町、稲成町、西牟婁郡上富田町朝来、岩崎、白浜町大古、安宅、十九淵	2014.04.12 ～ 2015.01.09	—	国土交通省（近畿地方整備局）

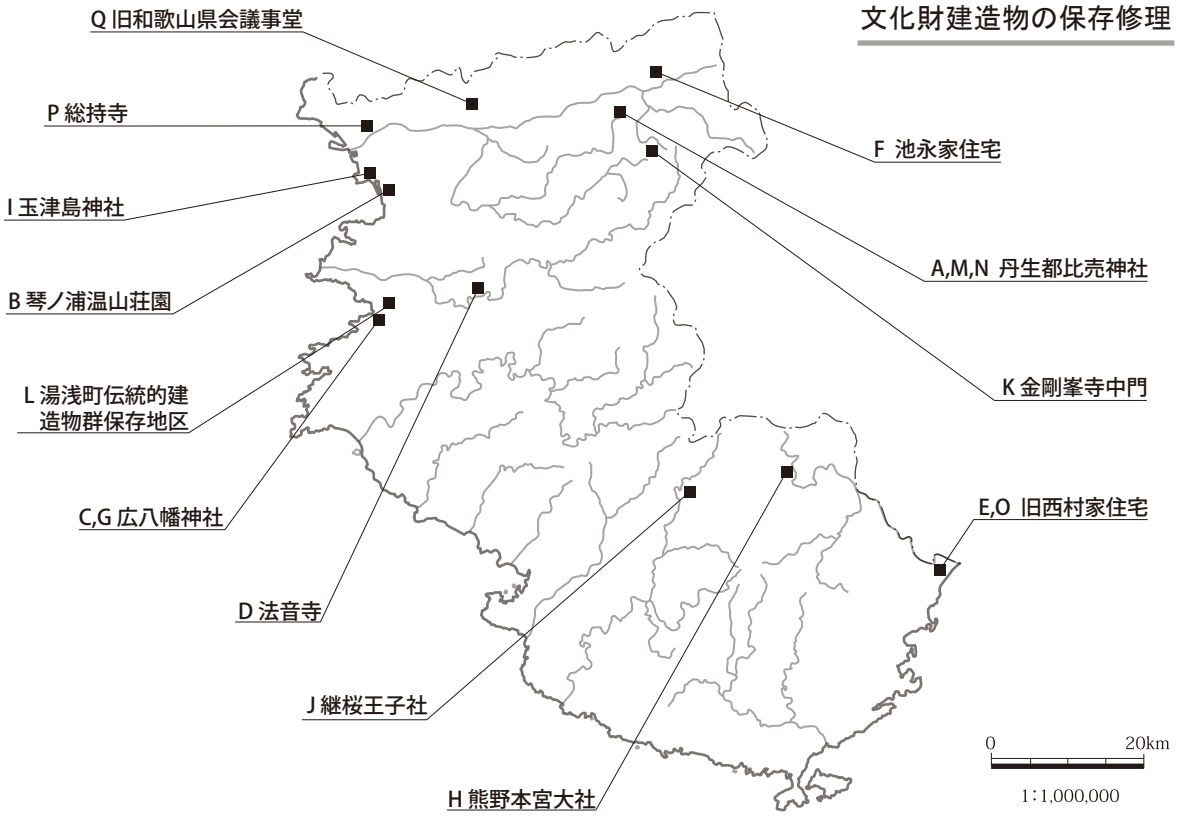
文化財建造物の保存修理技術指導業務等

	受託業務名称		所在地	実施期間	棟数	委託機関等
A	重要文化財	丹生都比売神社本殿保存修理技術指導	伊都郡かつらぎ町	2014.04.01 ～ 2014.12.31	4 棟	宗教法人 丹生都比売神社
B	重要文化財	琴ノ浦温山荘浜座敷ほか２棟保存修理技術指導	海南市船尾	2014.04.01 ～ 2015.03.31	3 棟	公益財団法人 琴ノ浦温山荘園
C	重要文化財	広八幡神社本殿ほか５棟保存修理技術指導	有田郡広川町	2014.11.04 ～ 2015.03.31	6 棟	宗教法人　広八幡神社
D	重要文化財	法音寺本堂保存修理技術指導	有田郡有田川町	2014.11.04 ～ 2015.03.31	1 棟	宗教法人　法音寺
E	重要文化財	旧西村家住宅耐震対策事業技術指導	新宮市伊佐田町	2015.01.31 ～ 2015.03.31	1 棟	新宮市
F	登録文化財	旧橋本本陣池永家住宅主屋ほか３棟保存修理技術指導業務	橋本市橋本	2014.04.01 ～ 2015.03.31	4 棟	池永　洋三
G	県指定文化財	広八幡神社舞殿保存修理技術指導	有田郡広川町	2014.11.04 ～ 2015.03.31	1 棟	宗教法人　広八幡神社
H	国史跡	熊野三山史跡等保存整備技術指導	田辺市本宮町	2014.04.01 ～ 2014.09.30	5 棟	宗教法人 熊野本宮大社
I	国名勝	玉津島神社本殿保存整備技術指導	和歌山市和歌浦	2014.09.03 ～ 2015.03.31	1 棟	宗教法人　玉津島神社
J	国史跡	継桜王子社保存修理技術指導	田辺市中辺路町	2014.09.26 ～ 2015.03.31	1 棟	田辺市
K	国史跡	高野山金剛峯寺伽藍中門再建工事技術指導	伊都郡高野町高野山	2014.04.01 ～ 2014.12.31	1 棟	宗教法人　金剛峯寺
L	伝統的建造物群保存地区	湯浅町湯浅伝統的建造物群保存地区保存修理技術指導	有田郡湯浅町湯浅	2014.05.16 ～ 2015.03.20	—	湯浅町
M	重要文化財	丹生都比売神社本殿保存修理事業報告書編集	伊都郡かつらぎ町	2014.10.01 ～ 2015.03.31	4 棟	宗教法人 丹生都比売神社
N	重要文化財	丹生都比売神社本殿及び楼門防災施設等事業に関する技術指導	伊都郡かつらぎ町	2014.10.01 ～ 2015.03.31	5 棟	宗教法人 丹生都比売神社
O	重要文化財	旧西村家住宅耐震診断業務にかかる解体工事監理	新宮市伊佐田町	2015.02.02 ～ 2015.03.31	1 棟	一般財団法人 建築研究協会
P	県指定文化財	総持寺総門及び鐘楼保存修理事業技術指導	和歌山市梶取	2015.02.09 ～ 2015.03.31	2 棟	宗教法人　総持寺
Q	県指定文化財	旧和歌山県会議事堂組立工事監理協力	岩出市根来	2014.04.08 ～ 2015.03.31	1 棟	一般財団法人 建築研究協会

平成26（2014）年度　受託業務所在地図

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物整理

文化財建造物の保存修理



川辺遺跡の発掘調査

遺跡の時代：縄文～室町時代
所　在　地：和歌山市川辺・藤田
調査の原因：都市計画道路西脇山口線建設工事
調 査 期 間：2014.10 ～ 2015.03
調査コード：14-01･145

はじめに

川辺遺跡は、紀ノ川下流右岸に位置し、紀ノ川が形成した自然堤防と和泉山脈から流れる雄ノ山川の扇状地に展開している。扇状地上には北方向に山口遺跡や県指定史跡の山口廃寺が、自然堤防上には下流方向に西田井遺跡や田屋遺跡などの紀ノ川流域を代表するような集落遺跡が連なっている。また、遺跡の北側を古代の南海道が東西に走り、遺跡付近を熊野参詣道が南北に通るなど、遺跡周辺は交通の要衝であった。

川辺遺跡は既往の調査で、縄文時代晩期の土器棺墓、弥生時代から古墳時代にかけての集落や前方後方形の周溝墓、古代の掘立柱建物や道路状遺構、中世の掘立柱建物などが見つかっている。

調査の成果

調査した場所は、遺跡範囲の北西部で、調査面積は820㎡である。調査は３面の遺構面を対象に実施している。

第１遺構面　中世後半頃から近世頃の水田面で、南東部は数十㎝高くなり、水田に段差があったことが窺える。検出した遺構には、耕作に伴う鋤溝などがある。

第２遺構面　鎌倉時代頃の水田面であるとともに、古墳時代から鎌倉時代の生活面である。南東部には、やはり段差が存在し、一段高くなっている。検出した遺構には、水田耕作に伴う鋤溝のほか、東西方向と南北方向の溝、落ち込み状遺構・土坑などがある。

東西方向の溝は、古代のものと考えられ、南東部の段差に平行するように、ほぼ同じ方向に掘削されている。同様な溝は、東側の道路部分でも確認されており、微高地の後背地に延々と掘削されていたことが窺える。

南東部の一段高い箇所で検出した遺構 027 は、楕円形を呈する土坑で、形状から井戸の可能性もある。鎌倉時代前期頃の瓦器や土師器、瓦質土器など当時の食器類が一揃い出土し、完形品も多い。

第３遺構面　古墳時代以前の地形であると考えられ、東西に走る谷状地形と土坑などを検出した。

まとめ

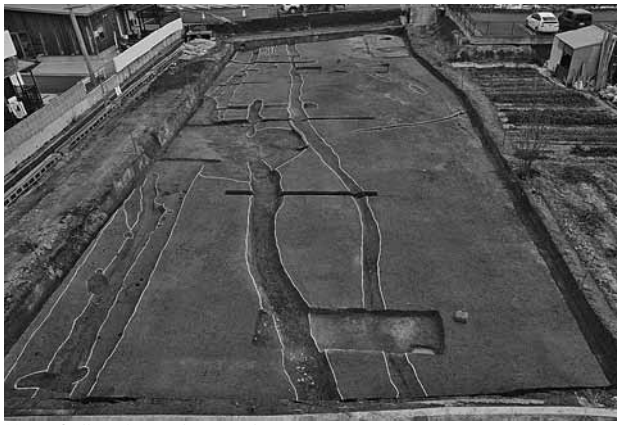
調査区南東部の高まりは微高地の縁辺部で、調査で出土した遺物の量が少ないのも、集落の中心から、やや離れているからであると考えられる。

東西に走る溝は、古代の水路の用途が考えられ、落ち込み状遺構に関しては、溝との重複関係が平面で検出できないことや、底の高さが溝とほぼ同じであることなどから、用水を一時的に溜める池であった可能性もある。

調査区付近が水田となるのは中世前半頃で、それ以降、近・現代まで連綿と水田として推移していることが窺える。

（川崎　雅史）

遺跡位置図


第２遺構面全景（西から）

岩橋千塚古墳群の発掘調査等支援

遺跡の時代：古墳時代
所　在　地：和歌山市岩橋・鳴神・下和佐・西
調査の原因：岩橋千塚古墳群追加指定
調 査 期 間：2015.01 ～ 2015.03

はじめに

和歌山県教育委員会は岩橋千塚古墳群の追加指定を行うために大谷山 22 号墳の確認調査、天王塚山古墳の調査準備作業を行うこととなった。当センターは発掘調査等支援業務として業務を受託している。

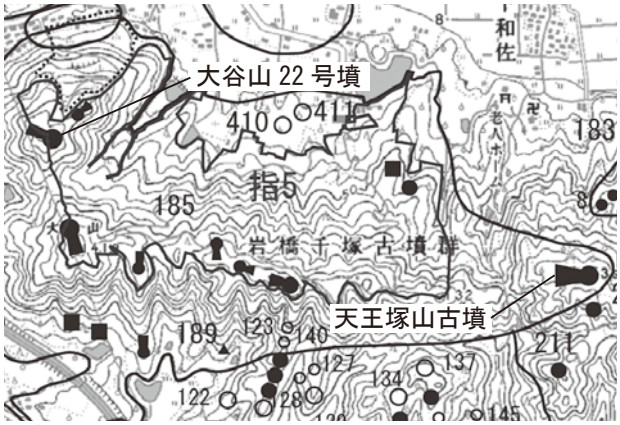
大谷山 22 号墳の確認調査では、トレンチを後円部１箇所、北側くびれ部 1 箇所、前方部 1 箇所の計 3 箇所に設定した。

天王塚山古墳の調査準備作業では、次年度に測量作業を行うため、その準備として墳丘上の竹・樹木の伐採を行った。

また、応急出土遺物整理として大谷山 22 号墳から出土した遺物の洗浄を行った。

調査の成果

大谷山 22 号墳の前方部に設定した 1 トレンチでは、基壇テラスとそれに伴う埴輪列を検出した。埴輪列から約８m西側では基壇の裾を確認している。基壇斜面からは墳丘側から流れ込んだと考えられる埴輪片が多数出土した。



調査位置図

北側くびれ部に設定した２トレンチでも埴輪列を検出しているが、周辺地形や他のトレンチの成果などから墳丘１段目テラスに伴う埴輪列と考えられる。基壇テラスとそれに伴う埴輪列は確認できなかった。

後円部に存在した盗掘坑に重なるように設定した３トレンチでは、１トレンチと同様に基壇テラスと基壇テラスに伴う埴輪列を検出した。また、盗掘坑南側の土層で墳丘１段目テラスを確認している。

まとめ

調査の結果、昭和 39 年に関西大学考古学研究室が調査を行った際に検出した埴輪列に続くとみられる樹立埴輪列を検出した。また、全てのトレンチで墳丘の裾と基壇の裾を確認できたため、墳長が約 70 m、全長が約 80 mであることが分かった。築造時期は６世紀前半に位置付けられ、大日山 35 号墳とほぼ同時期に造られたものと考えられる。遺物は、円筒埴輪が大半を占めるが、蓋形埴輪や人物埴輪といった形象埴輪、須恵器杯身などが出土している。　　（山本　光俊）

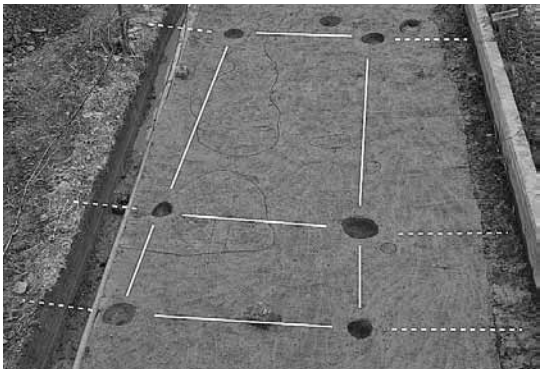
１トレンチ全景（東から）

３トレンチ埴輪列（北から）
※掲載写真は、和歌山県教育委員会提供

神前遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代・中世
所　在　地：和歌山市神前
調査の原因：県道秋月海南線改良工事
調 査 期 間：2014.03 ～ 2014.08
調査コード：13-01・307

発掘調査位置


掘立柱建物跡【10024】（中世）

土坑【10043】（弥生時代前期後半）

はじめに

神前遺跡は和歌山平野の南東部に位置する。県道秋月海南線道路改良に伴い 325㎡を対象として本発掘調査を実施した。

発掘調査終了後は、引き続き出土遺物等の整理を行い、発掘調査報告書を刊行した。なお、発掘調査報告書には、平成 26 年 1 月に和歌山県教育委員会が実施した 9 区の調査成果も収録している。

発掘調査の概要

調査区は、県第 4 次調査 6・ 7 区の東側に位置し、東西約 4 m、南北約 80 mの長細い形状を呈する。遺物包含層は残存しておらず、遺構は全て現代耕作土直下で検出された。4 段階の遺構が混在しており、最上層が中世、上層・中層遺構が弥生時代中期、下層遺構が弥生時代前期の遺構である。なお、上層・中層遺構は、遺構の重複関係が認められたが、出土遺物等による明確な時期差は認められない。

弥生時代の遺構

県第 4 次調査の際に検出されていた溝状遺構の続きが確認されたとともに、弥生時代前期の土坑（10043）及び中期の土坑（10042）を検出した。溝状遺構のほとんどは、自然流路であった可能性が高い。

2 基の土坑の性格は不明であるが、規模や出土遺物から土壙墓である可能性もある。

中世の遺構

掘立柱建物跡、溝状遺構のほか、土坑・ピットを検出した。そのうち、掘立柱建物（10024）は、その構造から南北 2 間、東西 1 間以上の庇付きの建物であったと考えられる。建物の向きがほぼ南北であることから、条里整備以降に建築されたと考えられる。

まとめ

弥生時代の遺構は、断片的であるものの、ほとんどが溝状遺構であり調査区の南 1/3 の範囲では確認されていない。このことは、調査区付近が集落跡の南限であったことを示している。なお、弥生時代の遺構が確認されない範囲では、中世の掘立柱建物跡等を検出していることから、中世段階では弥生時代に比べ集落範囲が南へ広がっていたことをうかがわせる。　　（高橋　智也）

平井遺跡の第３次発掘調査

遺跡の時代：弥生～近世
所　在　地：和歌山市平井
調査の原因：一般国道 26 号第二阪和国道建設
調 査 期 間：2014.04 ～ 2014.07
調査コード：14-01・399

はじめに

平井遺跡の調査は、平成 25 年度に第 1 次及び第 2 次調査を実施している。

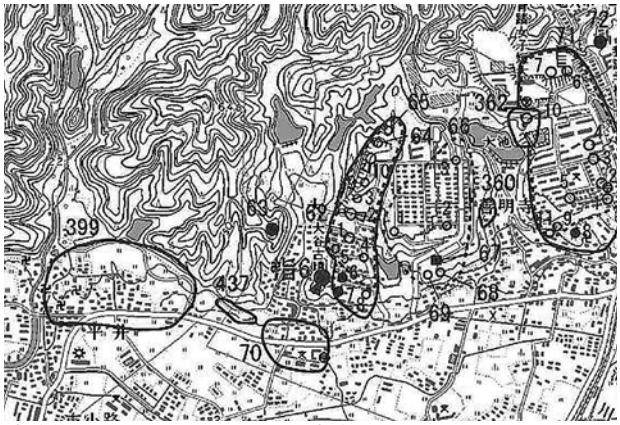
第 1 次調査では、古墳時代の横穴式石室 1 基と石室の痕跡と思われる土坑 1 基や埴輪窯 2 基、奈良時代及び中世の、柱穴・土坑・溝・井戸などを検出した。

第 2 次調査では、奈良時代の柱穴や土坑、中世の柱穴・土坑・溝のほか地鎮遺構も検出した。

第 3 次調査の調査地は東西２地点に分かれる。西側の調査地は昨年度に調査を実施した第１次調査の１区及び２区に各々連続する水田であることから、北側の水田範囲を１－２区、南側の水田範囲を２－２区と呼称した。東側の調査地は第１次調査で検出された埴輪窯の現地保存される範囲が対象地である。第１次調査時の調査区名を準用し３－N区とした。西側調査地の調査途中で、新たに弥生時代の遺物包含層と遺構面の展開する範囲が明らかとなったため、記録保存を要する範囲を変更し、一部の範囲（1－2区）を遺構面２面として調査を実施した。

１－２区・２－２区　第１遺構面検出遺構

溝とピットを検出したが、近世以降に削平を受けたためか、遺構密度は希薄である。溝の幅は 20 ～ 40cm で、深さは 5 cm前後しか遺存していない。ピットは直径 30 ～ 50cm前後、深さは 10cm程である。



遺跡位置図　　399：平井遺跡

１－２区・２－２区　第２遺構面検出遺構

弥生時代の竪穴建物や土坑の他、方形周溝墓を検出した。竪穴建物は２棟検出した。１棟（33 竪穴建物）は、やや隅円気味の円形を呈し、中央土坑の両側の相対する位置に２つの小穴を設けた、いわゆる松菊里型住居である。他の１棟は円形を呈し、同心円状に１回の拡張を行っている。方形周溝墓は、調査地東端部で検出した。規模は東西 10.40 m×南北 8.60 mで、北東部に陸橋部を有する。盛土は削平されており、埋葬施設は検出できなかった。周溝からは完形品を含む弥生土器が多数出土している。

３―N区

257 埴輪窯（２号窯）及び灰原部の外縁を含めた範囲の剥ぎ取り（型取り）保存を実施した後、窯体部及び灰原を窯構築面（操業開始面）まで掘り下げた。その後、現地保存範囲について、砂を使用した埋戻しとシート養生作業を行った。　　（井石　好裕）

１－２区・２－２区　第２遺構面全景（南東から）

方形周溝墓（北西から）

平井遺跡の第４次発掘調査

遺跡の時代：弥生～近世
所　在　地：和歌山市平井
調査の原因：一般国道 26 号第二阪和国道建設
調 査 期 間：2014.06 ～ 2014.09
調査コード：14-01・399-2

はじめに

平井遺跡の第４次調査は、発掘調査途中において、隣接する第３次調査地から連続して弥生時代の遺物包含層と遺構面の展開することが明らかとなった。このため、調査区約 1/2 の範囲の遺構面は２面である。

第１遺構面検出遺構

検出した遺構には、古墳の横穴式石室、古墳時代の土坑、古代から中世にかけての柱穴・土坑・溝がある。

横穴式石室は、調査区南東部で２基検出した。共に南西に開口する両袖式の横穴式石室で、玄室と羨道の基底部の石１～２段分のみが残存する。また、玄室と羨道の中央部に小礫を使用した排水溝を設ける。石材は、最大 1.3 m× 1.0 m前後と大型のものが多く、玄室では長辺を縦方向に使用しているものが多くみられる。遺物は、完形の須恵器や土師器のほか、両石室で耳環が各１点出土している。また、東側石室の玄室左側壁側で人骨が出土し、頭部と脚部の一部と思われる。土坑のうち１基は、最大 1.6 mの礫石が散乱した状態で検出され、破壊された石室の残骸である可能性がある。

調査地（北西から）

第２遺構面検出遺構

弥生時代の竪穴建物・土坑・溝・ピットを検出した。

竪穴建物は、調査区南西部で５基検出している。何れも円形を呈し、壁面の残存高は 10 ～ 30㎝とばらつきがある。１～２回拡張を行っているものや、重複関係のある建物があることから２時期以上の時期差があるものと考えられる。なお、1 基は松菊里型住居である。

まとめ

今回の第４次調査で検出した主要な遺構は、古墳の横穴式石室２基と、弥生時代の竪穴建物５棟である。

横穴式石室は、平成 25 年度の第１次調査で１基を検出し、また、石材が抜き取られたと考えられる土坑状の遺構１基が確認されている。今回の２基と合わせれば計４基の古墳に伴う石室の存在が明らかとなった。何れも基底部が残存していたのみであることを考えれば、更に複数基の存在も想定される。詳細な時期は、今後の整理作業を経る必要があるが、今回検出した２基の時期は、１基は６世紀中葉、他の１基は６世紀後葉から７世紀初頭と考えられる。

弥生時代の竪穴建物は、今回の調査で５棟、第３次調査で２棟が検出されている。時期は、第３次調査の２棟は弥生時細中期中葉、今回の調査で検出した５棟は中期後葉から後期前葉と考えられる。第１次及び第２次調査では当該期の遺構は検出されていないことから、立地条件も含め検討すべき課題である。

（井石　好裕）

横穴式石室　遺物出土状況

根来寺遺跡の発掘調査

遺跡の時代：中世後期
所　在　地：岩出市根来
調査の原因：根来寺周辺観光促進事業
調 査 期 間：2014.01 ～ 2014.03
調査コード：14-11・016

はじめに

当該地では、岩出市により旧県会議事堂移転地の西側において根来寺観光促進拠点整備事業が計画され、岩出市教育委員会では保存資料を作成するとともに、その重要性且つ適切な実施計画策定をするため確認（試掘）調査を実施した。確認調査終了後、岩出市から埋蔵文化財発掘通知が提出され、このことに対し、県教育委員会から道路敷地部分の発掘調査を要する旨の通知がなされた。次いで、岩出市と当センターが「根来寺周辺観光促進事業拠点整備に伴う根来寺遺跡発掘調査業務」として委託契約を締結し、調査に着手した。

調査の成果

調査範囲は、ほぼＴ字状を呈した道路敷に当たる部分のみを行った。Ｔ字状の東西方向を１区、南北方向を２区として調査を実施した。調査面積は全体で 899 ㎡である。１区の現況は、東端が雑種地となり西側より約５m 高くなり、西側は資材置き場となっていたが元は水田であった。２区は北から南に傾斜のつく谷状地形で、水田が３段の雛壇状となる。調査箇所は、この水田の西側の道路敷部分と水路部分である。故に、１区の西端と２区の南端が同レベルとなる。

次に主だった遺構について記述する。

１区で検出した遺構には、東端の高所で石組溝、土坑状遺構、石組遺構がある。西側の水田部分では石垣、溝状遺構、暗渠排水溝、焼土の詰まった土坑状遺構、石組井戸などがある。高所で検出した石組溝は底石を敷き、調査区外の東側から続くもので１段下に流し込んでいたと考えられる。更に、この下段の水田部との境では、基底部の１石のみの遺存ではあったが南北方向の石垣を調査区幅（約 8.5m）で検出した。この石垣は高所と低所の敷地を限る石垣で、谷部の敷地の範囲を示唆する重要な遺構となり得るものである。また、この石垣の西に並行して一部に石積みが遺こる溝を検出し、その西側には石組暗渠排水溝、土坑状遺構、埋甕などの子院建物内で機能していたであろうと考えられる遺構を検出した。土坑状遺構は敷地の中央部で２基検出した。双方ともに北側は調査区外に延び規模は不明であったが、埋土の焼土層からは白磁皿・青磁盤や青白磁梅瓶といった中国製磁器の破片、備前焼壺・甕、瓦などが一定量出土した。敷地の西端では石組井戸を検出した。井戸は水田化の際に大きな石で塞がれていたため、深さ約 5.1m の空洞となっていた。

２区は現状の水路及び道路により殆どの遺構が削平されていたが、岩出市の確認調査で検出された石組排水溝の西側への続きを検出した。また、北側から２段分の敷地の西側を限る南北方向の石垣基底部を検出し、２段目敷地の南側を限る東西方向の石垣基底部も検出した。

まとめ

今回の調査では、１区及び２区で敷地を限る石垣を検出した。特に２区で検出した南北方向の石垣は雛壇状の建物敷地の西限にあたり、さらに西側の「わかもの広場」は元は独立丘陵で、この丘陵と石垣までが往時の谷川となっていたと推測できる。　（佐伯　和也）

１区東端全景（西から

２区全景（北から）

出塔の水道の発掘調査

遺跡の時代：近世
所　在　地：橋本市出塔地内
調査の原因：山田川砂防工事に伴う発掘調査
調 査 期 間：2014.02 ～ 2014.07
調査コード：13-12・092

はじめに

出塔の水道は、橋本市出塔、和泉山地の南麓裾部に形成された小規模な扇状地に所在している。概念図に示すように、扇状地を流れる山田川の左岸 (北側) の湧水を集め、川に直交するかたちで川の下を潜らせて右岸側に導水する暗渠構造の水利施設である。古くは周辺の人々の生活用水としても利用されていたようであるが、主な目的は下流に位置する柏原地区への灌漑用水であった。今回、山田川の砂防工事に伴って、はじめてこの " 出塔の水道 " の発掘調査を実施する機会を得、その構造や築造時期を明らかにすることができた。

調査の成果

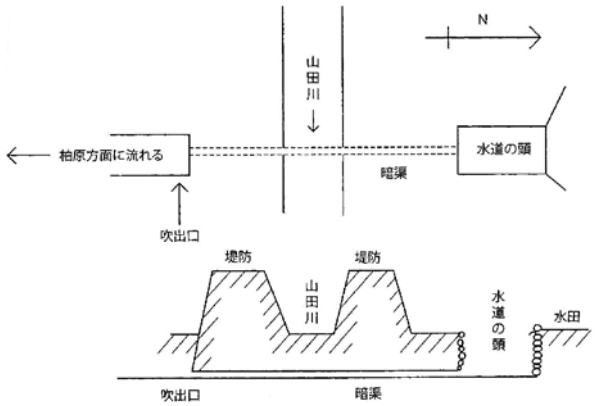
その構造を簡単に説明すると、まず水を流す本体の中心部分は、幅 30cm、高さ 20cm 四方ほどの溝になっており、側石には 40cm 前後の石を横置きに用い、この側石に直行するように 40 ～ 60cm 大のやや大振りの石を蓋石として架橋している。底部には石は認められず、水が絶えず流れているため詳細な観察はできなかったが、漏水防止のため粘土が敷かれているようであった。

さらにこの本体部を覆うように 20cm 前後の河原石を 1m ほどの厚さにわたって充填しているのが確認された。また、これらの東側に沿って黄色の粘土が帯状に厚く貼られていることも判明しました。

充填されていた河原石は、本体部分を擁護するとともに、おそらく伏流して西側から滲みだしてくる水を受け入れ、本体部へと導く役割を担っていたものと思われる。逆に黄色の粘土帯は、ここで水を塞き止、東側に逃がさない漏水防止のために施されたものであろう。

なお、築造時期は出土遺物とした遺物から、概ね江戸時代中期後半、18 世紀後半から末にかけて造られたものと判断される。

（村田　弘）



出塔の水道概念図

河床部の調査区全景 (南から)

蓋石をはずした状況 (南から)

木津遺跡の発掘調査

遺跡の時代：中世（13 ～ 16 世紀）
所　在　地：海南市木津
調査の原因：国道 424 号道路改良事業
調 査 期 間：2014.12 ～ 2015.02
調査コード：14-02・053

はじめに

国道 424 号の道路改良事業に伴い、平成 26 年 12 月から平成 27 年 2 月まで、海南市木津地内の発掘調査を実施した。調査前の現況は、田、畑である。

調査の成果

調査区は、1 区と 2 区がある。ともに調査区内に東西で 0.5 ～ 0.8m の段差があって 2 段に分かれ、西側が上段、東側が下段となる。西側の最も高い部分は標高約 69m である。

検出遺構はピット、土坑、溝状遺構等がある。ピットには掘立柱建物を建てるための柱を据えたとみられるもの（柱穴）があり、7 棟分が検出されたが、そのなかには自然石を据えて礎板としたものも確認された。

遺物は瓦、土師質土器、瓦器、青磁、国産陶器、金属製品等がある。

瓦が最も多く出土しているが、完形のものは無く、軒丸瓦、軒平瓦もともに数点の出土で、瓦当部分の文様を完全に残すものはない。ただ軒丸瓦は残存部分からみて、三つ巴文の周囲に 28 個程度の連珠文を配するものであったことが分かる。また、周縁部を高くつくり、瓦当面に離れ砂が付着する等の特徴を有する。軒平瓦は瓦当文様に唐草文を配し、界線を設けず、顎貼付けと呼ばれる技法で製作されている。顎部は低くつくられ、その後部には凹型台の痕跡を残しヨコナデで仕上げている。これらの特徴から、瓦はその帰属時期が 13 ～ 14 世紀とみられるものが含まれているとみられるものの、帰属時期の判断には今後製作技法等について詳細に検討を加える必要がある。また、軒平瓦は文様が判明しているのは一部分のみではあるが、平成 22 年度に当センターが調査を実施した北山三嶋遺跡（北山廃寺）において検出された瓦窯跡（258、25- 窯）で出土したものに非常によく似ている。

このほか、土坑から出土した灰釉陶器の平椀は古瀬戸後期様式 1 ～ 2 段階と判断され、擂鉢はいずれも破片のみの出土であるが、多様な形態のものがあり 15 ～ 16 世紀頃とみられるものもある。

2 区南端では 1.5m 程度の間隔をおいて平行に延びる幅 0.2 ～ 0.3m の溝状遺構を検出した。これらの溝状遺構に挟まれた部分には硬化面が検出され、露出した礫表面は著しい磨滅が確認されたことから、通路として使用された可能性が高く、硬化面上や溝状遺構内では炭化物とともに礫や瓦片等の遺物が集中して出土した。

遺構や出土遺物等から、本遺跡の性格としては城館や寺院が推定される。北方の紀の川流域から貴志川沿いを経て南の有田川町方面に至る交通路の沿線に位置し、近隣に所在する城館等、当該時期の遺跡との関連性を含め評価する必要があると考えられる。

（寺西　朗平）

1 区　掘立柱建物柱穴等 遺構集中部分（上が西）

出土した瓦

立野遺跡の発掘調査及び整理業務

遺跡の時代：弥生～鎌倉時代
所　在　地：西牟婁郡すさみ町周参見
調査の原因：近畿自動車道紀勢線の建設
調 査 期 間：2014.04 ～ 2014.10
調査コード：14-41･002

はじめに

立野遺跡は、和歌山県南部で太平洋に注ぐ周参見川流域に位置する。遺跡は、海岸から約 2.5 ｋｍ遡った低地部に展開する。これまでに自動車道の建設に伴い平成 22 年度に本線部分、平成 24 年度にインターチェンジ部分の発掘調査がおこなわれている。平成 22 年度の調査では、弥生時代前期の自然流路から多量の木製品や土器・石器が出土し、木製品を製作していた集落の様相が明らかになっている。

今回、自動車道の北側を盛土して通信施設が建設にされることになり、県文化遺産課の試掘確認調査の結果を受けて、開発予定地の北西部分について本発掘調査を実施した。

現地での調査は、4 月から 8 月にかけて面積 2,840 ㎡を対象に実施し、その後、出土遺物等整理業務を 10 月までおこない報告書を刊行した。

調査の成果

調査区は 12 区と 13 区の二つに分かれ、12 区は 8 層上面で、13 区は 6 層上面と 8 層上面の 2 面で遺構を検出した。

8 層上面の遺構　検出した遺構には、自然流路･溝･土坑などがある。自然流路は南北方向に流れ、弥生時代以前のものと弥生時代前期頃に埋没するもの（遺構 001・003）がある。このうち遺構 001 は、ある程度埋没した段階で、一定の場所に礫を集め、杭を打ち込んでいた。ただ、その性格については明らかでない。

6 層上面の遺構　検出した遺構には、溝状遺構や土坑、杭列がある。古代以降の水田面であると考えられ、溝状遺構や杭列は耕作に係る遺構であると考えられる。

遺物量は多くないが、弥生時代前期から中世にかけての各時期の遺物が出土している。

まとめ

遺構の数、遺物の量は平成 22・24 年度調査に比べ少ないことからも、調査した地区は集落の縁辺部に相当し、水田が営まれていた生産域であったと想定できる。既往の調査結果などからも、微高地となる現在の町道に沿う付近や、遺跡北側に居住域を比定することができ、実際、同時並行で行われていたすさみ町公共施設移転に伴う調査でも北に向かって遺構密度が濃くなっていることが分かっている。立野地区に人々が住み始めるのは、弥生時代前期になってからで、自然流路脇の水利が良い場所に水田を確保し、当初は木製品の生産などもおこなっていたと考えられる。水田開発を行う前には、流路の岸にはクス等の大木が生えていたことが窺え、それらを木製品の材料に使っていたことも想像できる。また、弥生時代前期以降中世にかけても連綿と集落が営まれたことが、出土遺物からも明らかである。　（川崎　雅史）

遺跡位置図

13 区 8 層上面の遺構（北から）

立野遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代
所　在　地：すさみ町立野
調査の原因：すさみ町公共施設移転
調 査 期 間：2014.05 ～ 2014.09
調査コード：14-41・002-2

はじめに

立野遺跡は、これまでに平成 22 年度に近畿自動車道紀勢線建設に伴う調査と、平成 24 年度にすさみ西インター建設に伴う調査を実施している。平成 22 年度の調査では弥生時代前期から鎌倉時代にかけての遺構や遺物が確認できた。特に自然流路からは弥生時代前期の木製品・石器・土器等の遺物が多量に出土した。

木製品については容器・農具・工具・狩猟具等とバラエティーに富み、これらには製品や製作途中のものもある。24 年度の調査でも流路の続きを検出し、土器や木製品が出土している。

調査の成果

本調査地は、上記既往の調査地の北東約 30 ～ 150m 地点で、調査面積 6,079㎡を実施した。また、本調査と並行して近畿自動車道建設に伴う第 2 次調査が南側に隣接して実施された。

調査区は、近畿自動車道建設関連の調査で作業工程上付した地区割を踏襲し、14 区・15 区と呼称した。遺構検出面は 14 区が 1 面、15 区が 2 面である。

次に、主だった遺構について記述する。明瞭な遺構については14区の北側で検出した。検出した遺構には、弥生時代の自然流路、土坑状遺構、溝状遺構、土坑墓、ピット状遺構、古墳時代の掘立柱建物などがある。

【遺構 18】調査区の 14 区と 15 区の全域に渡り網目状に検出した自然流路である。北から南方向に流れていたと考えられる。同時並行の近畿自動車道第 2 次調査に続く遺構である。また、本調査区の中央を現有の用水路が流れており、流路はこの用水路を跨ぐ状況で検出した。このことから、検出した流路の方向を現有水路が踏襲して現代に至っていることが判明した。

【遺構 46】14 区の北端で検出した東西方向の溝である。調査区外の西側の独立丘陵裾部の微高地から流れていると思われる。検出長は約 56m、幅は 0.8 ～ 3.1m、残存の深さは 0.33 ～ 0.44m を測る。断面形状は「U」或いは「V」字状を呈し、人為的に掘削された可能性が大きい。出土した土器や石器剥片から弥生時代中期前葉の時期と考えられる。

【遺構 62】西側では遺構 46 と重複し、南東方向に延び自然流路と重複し、その延長は不明である。遺構 46 より新しく、出土土器から弥生時代終末期である。

【遺構 101】調査区北西の微高地上で検出した土坑状遺構である。規模は東西長約 2.0m、南北長約 1.0 の長楕円形を呈し、残存の深さは 0.16m を測る。底からは礫石器 6 点と石鏃 1 点が集中し、他に弥生時代中期の土器細片と頁岩剥片、骨片も微量出土した。以上のことから弥生時代中期の土坑墓と考えられる。

まとめ

今回の調査地は谷状地形の最も低い箇所であったため遺構密度は希薄で、調査地の南半部及び北東のエリアについては旧流路が網目状に展開していた。各時代の遺構は、西側の微高地に密集すると思われ、今後の調査で生活域の範囲解明に期待がもたれる。（佐伯　和也）

調査地全景（南から）

遺構 101 完掘状況（東から）

和田遺跡の出土遺物等整理

遺跡の時代：弥生時代・古墳時代・奈良時代
所　在　地：和歌山市和田
調査の原因：秋月海南線道路改良工事
整 理 期 間：2014.06 ～ 2015.02
対象コード：12-01・301、12-01・301-2

はじめに

調査で出土した遺物は、調査報告書作成に伴い注記・接合、遺物充填材による補強・復元、実測の一連の整理作業を行った。現地調査の遺構図面は、トレース・レイアウト作業を行い、遺構写真については遺構写真図版などを作成した。

作業の概要

出土遺物の内、土器類は、通常の遺物収納コンテナ（容量 28ℓ）にして 110 箱ある。その他、石器・鉄器・木器がある。出土遺物は、調査現場での応急整理で整理済みの物を省いて、遺物に調査コードと出土遺物登録番号の注記作業、接合作業（写真）を行った。

基礎的な作業を経た主要遺物を対象に、遺物充填材による補強・復元作業、遺物実測（写真）・実測遺物台帳登録・遺物実測図仮レイアウト・遺物実測図の整理、トレース作業・レイアウト図版作成、遺物写真撮影、各種データ等の P.C 入力を行った。

遺物写真撮影を行ったものから写真を抽出して調査報告書に掲載する遺物写真図版を作成した。

現地調査の遺構図面については、抽出した遺構図面のトレース作業・調査報告書に掲載するレイアウト図版作成作業を行った。

遺構写真については、現地調査で撮影した遺構写真から主立ったものを抽出して調査報告書に掲載する遺構写真図版を作成した。

遺物破片は、土器の遺存状況が著しく不良な物が多く、かつ細片が主体となるため、一定の基準を設けて内容登録を行った。また、遺構・遺物の時期を把握するための手段として、出土遺物の内容を詳細に記録する方法をとった。

整理作業の成果

今回の和田遺跡の調査では、大きく第１次調査・第２次調査１・２区と第２次調査３・４区の中で南北方向もしくは東西方向の自然流路を挟んでいることが判明した。南北方向もしくは東西方向の自然流路の流向は、２箇所の生活域を分断する状態に位置する。

和田遺跡周辺は、従来の地理的な理解では低湿なラグーン性低地という生活域の存在の可能性が低いものであった。しかし、今回の調査では、弥生時代前期から奈良時代にかけて断続的に続く生活痕跡が明らかとなった。

多くの生活痕跡が存在することから考えれば、度重なる自然流水に悩まされながらも集落を営んでいたことは想像に難くない。現在においても和田川周辺は、度重なる冠水に見舞われる地域である。また、鎌倉時代以降の土地開発によっても多くの生活痕跡が削平を受け、本来の遺物包含層が水田耕作土として土壌化していったものと考えられる。　（土井　孝之）

遺物の接合作業

遺物の実測図作成作業

井辺遺跡及び神前遺跡の第３次出土遺物等整理

遺跡の時代：弥生時代、古墳時代、鎌倉時代
所　在　地：和歌山市井辺・神前
調査の原因：都市計画道路松島本渡線
（神前南）道路改良工事
整 理 期 間：2014.04 ～ 2014.08
対象コード：10-01・308、11-01・308-1、11-01・307-1

はじめに

本年度は、整理業務の３年次目に当たる。

昨年度に引き続き調査報告書作成に伴い一連の整理作業を行った。

出土遺物の内、土器・石器類は、通常の遺物収納コンテナ（容量 28 ℓ）にして合計 499 箱、木製品は 385 点である。遺物充填材を使用した遺物復元までの基礎的な作業は、2 年次目で既に完了している。

本年度は、遺物実測図のトレース・組版のレイアウト作業、遺構トレース図組版の作成、遺物写真撮影・遺物写真図版組版の作成、報告書原稿の作成を行った。

これらの作業を経た後、調査報告書を刊行し、和歌山県教育委員会に出土遺物の移管を行った。図面及び写真等の記録資料は当センターが保管している。

作業の概要

遺物実測図は、昨年度までに実測を終えた遺物図面のトレースを行い、印刷原稿としての組版のレイアウト作業を行った（写真）。

現地調査の遺構図面に関しては、昨年度までにトレースを終えたものの組版の作成を行った（写真）。

昨年度までに基礎的な整理作業の完了した遺物の写真撮影を行い、写真の整理を行うと共に主だったものを抽出して遺物写真図版の組版を作成した。

各々の作業によって作成した図面（挿図）・写真図版（遺構・遺物）の編集を行うと共に、本文原稿を執筆し、調査報告書を刊行した。

整理作業の成果

現時点では、北東－南西幅約 1,100 m・北西－南東幅約 500 mを測る長楕円形状を呈する井辺遺跡の広大な遺跡範囲内には少なくとも２箇所ないし３箇所程度の居住域の存在が指摘でき、今回の調査成果は、井辺遺跡の西側部分の居住域とその周辺状況の一端を明らかにしたと言える。井辺遺跡は、弥生時代後期後半以降の遺構・遺物が確認されたことから、当該期から集落の形成が始まったものと考えられる。集落の最盛期は、遺構・遺物からみて弥生時代終末期から古墳時代前期にある。

また、その調査の成果は、東側の丘陵に位置する井辺八幡山古墳を盟主墳とする井辺前山古墳群や岩橋千塚古墳群などの古墳群の築造集団との関係を考える上においても重要な視座が広がる。居住域や墓域の本体は、井辺遺跡と呼称される範囲の東側や北東側に位置する現集落と重複する県営岡崎団地や井辺団地周辺に立地することが判明しつつあるが、その規模・詳細については、面的な調査が少ない現時点では不明な部分も多いと言わざるを得ない。　（土井　孝之）

遺物実測図トレース図の組版作成

遺構実測図トレース図の組版作成

和歌山城跡（地方・家庭・簡易裁判所地点）出土遺物等整理

遺跡の時代：江戸時代ほか
所　在　地：和歌山市二番丁
調査の原因：和歌山地家簡裁庁舎建設工事
整 理 期 間：2014.04 ～ 2015.03
調査コード：11-01・375

はじめに

和歌山城に関連する遺跡は、内堀の中の天主・本丸・二の丸を含む範囲が史跡和歌山城として指定されており、その北と東に面する家臣の屋敷地が立ち並ぶ三の丸跡が埋蔵文化財包蔵地の和歌山城跡とされている。

今回整理対象とした遺物が出土した場所は和歌山城跡の東部で、江戸時代の武家屋敷地跡を検出した。発掘は平成 23 年度に実施し、約 2,760㎡を調査した。調査の原因は、和歌山地方・簡易・家庭裁判所の庁舎新営工事であり、標高 3.1 mから 1.6 mまでの間に 4 ～ 5 面の遺構面が確認されている。

整理作業の概要

整理作業は平成 26 年 4 月 2 日から平成 27 年 3 月 6 日まで、当センターの岩橋整理事務所及び、旧紀の川市貴志川庁舎の一部を借りて開設した貴志川整理事務所において実施した。整理作業では出土遺物の洗浄・注記・接合を行い、必要に応じて補強・復元・実測・トレースして発掘調査報告書に掲載した。

整理対象とした出土遺物は約 600 箱あり、江戸時代の土器・陶磁器類と瓦が約半数ずつを占めている。

瓦は多量の唐草紋滴水瓦と少量の蓮華紋滴水瓦のほか桑山家の桔梗紋軒丸瓦や紀州徳川家の三葉葵紋鬼瓦、家老の三浦家の軒丸瓦が出土した。瓦類は型式分類し、実測図と拓本をとった。

土器は古墳時代から室町時代までの須恵器・土師器・黒色土器・瓦器は微量で、江戸時代の土師質土器と陶磁器が多量に出土している。陶磁器は産地別でみると輸入陶磁（景徳鎮・漳州・徳化）、肥前系陶磁器（唐津・現川・伊万里・波佐見・鍋島）、瀬戸美濃系陶磁器（瀬戸・美濃・志野・織部）、京信楽系、堺、明石、丹波、備前、大谷、郡中十錦、萩、南紀男山、瑞芝が確認できる。陶磁器の実測図は、必要に応じて写真を貼り付け、染付の紋様や釉薬の掛け分けを表現した。

茶道の道具は少ないが、煎茶道の道具は「瑞芝」「粟田」銘を含む涼炉類のほか、染付・朱泥・素焼き・灰釉の急須、京信楽系・瀬戸・伊予の郡中十錦といった煎茶碗が出土している。このほか、手びねりの軟質黒釉陶器の鳥形香合が出土している。

19 世紀には窯道具のほか、「瑞芝」「化物堂」銘のある行平鍋や土瓶、素焼きの土器・ミニチュア土製品、無地の磁器・粗雑な上絵付けの製品などが多数出土している。ミニチュア土製品は施釉するものと土師質のものに分かれ、施釉するものには灰釉や鉄釉の行平鍋をまねて作ったミニチュア施釉土製品も確認できる。

石製品は石臼・硯・砥石が多数あり、珍しい石材として花崗斑岩・石灰石・チャート・コハク片が出土している。金属製品は刀装具や煙管が多数あり、木製品は漆塗り碗・下駄が確認された。このほか人骨・動物骨、貝類が出土した。

石材や骨、貝等については各分野の専門家に意見を聞き、報告書の作成に反映した。　（丹野　拓）

三葉葵紋鬼瓦

軟質黒釉陶器鳥形香炉

和歌山城跡の第１次出土遺物整理

遺跡の時代：近世・近代
所　在　地：和歌山市二番丁
調査の原因：和歌山地方合同庁舎新築
整 理 期 間：2014.08 ～ 2015.03
調査コード：13-01・379

はじめに

和歌山地方合同庁舎新築工事に伴い平成 25 年度に実施した和歌山城跡発掘調査では、陶磁器・瓦・木製品・土製品等、多くの遺物が出土した。今回の整理業務は、これらを対象として、平成 27 年度の発掘調査報告書刊行に向けた基礎整理作業を実施するとともに発掘調査報告書に掲載する遺構・遺物の図面作成や出土遺物の実測を実施した。

整理作業の経過

出土遺物整理の基礎作業として、出土遺物に付着した土等の汚れを除去する作業【水洗】、遺物の出土地点等のデータを遺物へ直接記録する作業【注記】、出土遺物の破片の接合関係を検討し、接着・補強する作業【接合・補強】を実施した。

これらの作業は、遺構内（第１～４遺構面）・包含層内（第１～４層）の区分及び陶磁器・瓦・木製品・土製品等の遺物の種類によって分類し、それに従って順に進めていった。

基礎作業が終了した後は、出土遺物等の重要性を考慮しながら発掘調査報告書掲載遺物の抽出作業を行った。抽出の対象は、遺構及び遺構面の時期決定に必要なもの、特殊なものを中心として、和歌山城跡を理解するうえで必要不可欠な出土遺物とした。

この抽出遺物を対象に、欠損部分を補填材で補填して全体形状を復原する作業【復原】、出土遺物の図化を行って調整等の観察内容を図に記入する作業【実測】を実施した。

また、発掘調査報告書に掲載する挿図作成の基礎作業として、遺構・遺物の原図を基に製図を行う作業【トレース】を実施した。

今後の課題

整理作業は平成 27 年度に継続して実施する予定であることから、今回、出土遺物等の詳細について報告できる事項は少ない。

ただし、陶磁器の大半が日常雑器である中、天目茶碗や織部様陶器等、茶道具と考えられる特殊な陶磁器類が周辺の調査地よりも比較的多く出土していることが特徴的であることを指摘できる。発掘調査地が上級藩士の屋敷跡であることから考えて、これらの特殊な遺物は江戸時代における紀州藩士の日常生活だけではなく、文化的側面についても検討する資料となると考えられる。

なお、平成 27 年度の事業では、平成 25 年度の発掘調査成果と今回の整理業務で実施した作業成果を基に、遺構の性格や遺構面の時期を再検討して発掘調査報告書を刊行する予定である。　　（高橋　智也）

接合作業の様子

実測作業の様子

近畿自動車道紀勢線事業に伴う第２次出土遺物等整理

遺跡の時代：弥生時代、古墳時代、平安時代、室町時代
所　在　地：田辺市秋津町・稲荷町、
　　西牟婁郡上富田町・白浜町
調査の原因：近畿自動車道紀勢線の建設事業
整 理 期 間：2014.04 ～ 2015.01
調査コード：９遺跡 13 次にわたる調査のため省略

はじめに

業務は、昨年度に引き続き近畿自動車道紀勢線の事業に伴い田辺市の目座遺跡・八丁田圃遺跡・稲成Ⅰ遺跡、西牟婁郡上富田町の塗屋城跡・岩崎大泓遺跡・岩崎大泓Ⅱ遺跡、西牟婁郡白浜町の田ノ口遺跡・大古Ⅱ遺跡・安宅本城跡の９遺跡 13 次にわたる調査により得られた出土遺物及び遺構図面・遺構写真等の整理である。

本年度は、調査報告書作成に伴い遺構図面のトレース、遺物の復元、実測図作成・トレース・レイアウト作業のほか、遺構写真については遺構写真図版の作成及び本文原稿の執筆を行った。

作業の概要

出土遺物の内、土器類は、通常の遺物収納コンテナ（容量 28ℓ）にして 144 箱である。その他、344 点の石器・石器類がある。

基礎的な作業を経た主要遺物を対象に、遺物充填材による復元作業、遺物実測・実測遺物台帳登録・遺物実測図仮レイアウト・遺物実測図の整理、トレース作業・レイアウト図版作成、遺物写真撮影、各種データ等の P.C 入力を行った。また、遺物は写真撮影を行ったものから主なものを抽出して調査報告書に掲載する遺物写真図版を作成した。

現地調査の遺構図面については、抽出した遺構図面のトレース作業・調査報告書に掲載するレイアウト図版作成作業を行った。

遺構写真については、現地調査で撮影した遺構写真から主立ったものを抽出して調査報告書に掲載する遺構写真図版を作成した（写真）。

遺構写真図版の組版作成

調査と整理作業の成果

近畿自動車道紀勢線事業に伴い、９箇所の遺跡の調査を行い、整理作業を進めた。その結果、八丁田圃遺跡では、弥生時代前期及び中期の遺構を検出し形成過程を知ることができた。また、遺物包含層中からは、石帯巡方が出土した。塗屋城跡では堀切とみられる遺構について、規模等を明らかにすることができた。大古Ⅱ遺跡では、弥生時代中期の遺構から建物と屋根飾りを描いた可能性のある絵画土器（写真）が出土したほか、緑釉陶器が出土し、古代とみられる掘立柱建物跡を検出した。稲成Ⅰ遺跡では、丘陵中腹において竪穴建物跡・掘立柱建物跡を検出し、古墳時代における集落の展開が確認されたほか、石帯巡方が出土した。田ノ口遺跡では、祭祀に伴う可能性のある遺構が検出され、権状石製品が出土した。これらの事から、今回の調査の対象となった地域においても弥生時代から連綿と続く人々の営みがあったことが判明した。

（土井　孝之）

大古Ⅱ遺跡出土の絵画土器

重要文化財　広八幡神社本殿ほか5棟
県指定文化財　広八幡神社舞殿の保存修理

建築年代：本殿、摂社若宮社本殿、摂社高良社本殿、楼門（室町時代）
摂社天神社本殿、拝殿（江戸時代）
県指定　舞殿（江戸時代）
所在地：有田郡広川町上中野
修理の種類：屋根葺替、塗装工事、部分修理、耐震診断
修理期間：2014.11 ～ 2016.10
2014.11 ～ 2015.03（県指定分）

事業の概要

稲むらの火の舞台としても知られる広八幡神社は、正面の楼門から境内に入ると、舞殿、拝殿、本殿が東西軸線上に並び建ち、本殿の脇に摂社若宮社本殿と摂社高良社本殿が配される。近世以前からの神社の構成が良く残されている。明治期に移築された摂社天神社本殿とあわせ六棟が重要文化財、舞殿が県文化財に指定されている。各建物は、昭和 55 ～ 56 年にかけて大規模な文化財修理を受けているが、経年による檜皮・柿葺屋根の痛みが目立ち始め、塗装の劣化も進んできたため、平成 26 年 11 月から事業期間 24 ヶ月間で、社殿は檜皮葺替と塗装修理、拝殿は柿葺替と塗装工事、楼門は塗装工事、舞殿は柿葺替と部分修理を実施することとなった。また文化庁の指導により、参拝者が利用する拝殿と楼門の耐震診断をあわせて実施した。

摂社高良社本殿・摂社天神社本殿

四殿が横一列に建ち並ぶ社殿において、先行して北半の摂社高良社と摂社天神社の工事を実施している。隣り合う二殿は工事を並行して進め、檜皮の葺き替えと箱棟の補修が完了した。続いて旧塗装の掻き落としを行い、丹・胡粉塗などの作業を進めている。

摂社天神社檜皮屋根葺き替えの状況（南東より見る）

楼門・拝殿

本瓦葺屋根である楼門は、今回塗装のみを修理する予定である。今年度は作業用の足場をかけて、旧塗装の掻き落としを実施した。前回の塗装は合成樹脂の硬い面を形成していたため、木部を痛めないよう丁寧に作業した。また、足場を利用して建物の詳細を調査し、拝殿とあわせ耐震診断を実施した。診断の結果、想定される南海トラフ地震により、大きな被害が生じる可能性が指摘されたが、外観等に影響が出ない範囲で対応できる構造補強の提案を行った。

楼門上層軒廻りの旧塗装掻き落とし状況

県指定　舞殿

柿の葺き替えとあわせ、床、縁、壁板など木部の破損箇所の補修を行った。また工事を進める中で東面の縁板が敷石と干渉して腐朽していることが確認されたため、県教育委員会に計画変更を申請し、樹木の根で押し上げられた敷石の据え直しなどの基礎工事もあわせて実施し、3 月末に竣工した。　（多井　忠嗣）

竣工した舞殿（南西より見る）

重要文化財　琴ノ浦温山荘浜座敷ほか 2 棟の保存修理

建 築 年 代：浜座敷、北冠木門（大正時代）、
正門（昭和時代）
所　在　地：海南市船尾
修理の種類：半解体修理、解体修理、部分修理
修 理 期 間：2013.06 ～ 2014.12

竣工した浜座敷を東より見る（背面は矢ノ島）

事業の概要

琴ノ浦温山荘は、実業家新田長次郎が黒江湾を望む海浜に営んだ別荘で、陸繋島であった矢ノ島との間を埋立て、潮入の池泉を造成した庭園内に各建物を配置している。建物の建設は、大正 2 年の浜座敷に始まり、同 4 年の主屋、9 年の茶室建設と続き、昭和初期までに正門が建てられて、概ね完了したとみられる。

庭園は随所にモルタルで精巧に製作された擬石が配され、当時の先進技術を用いて手がけられた特徴を有し、名勝に指定されている。主な建物では浜座敷、主屋、茶室が平成 22 年に重要文化財に指定されている。

今回の事業では、浜座敷を中心に正門と北冠木門の計三棟を昭和初期の姿に復旧・整備する計画で、平成 25 年 6 月に着手し、同 26 年 12 月に工事を完了した。浜座敷は台風の影響などで失われていた広縁木階や建具類、本瓦葺屋根の棟廻りなどの復原整備のほか、耐震診断に基づいた構造補強を併せて進めた。北冠木門については解体修理、正門は門柱の塗装を撤去し、モルタル洗い出し仕上げを現した。本年度一旦分解した部分の補修と組立てを行い、あわせて平成 26 年 3 月に文化庁の許可を得た現状変更箇所の復原と構造補強を実施した。

浜座敷

浜座敷は岩盤に縁束を立てる懸造風の外観で、入母屋造及び寄棟造、本瓦葺で小屋はキングポストを配した洋小屋を組む。軒は垂木を吹寄せに配る等、軽妙な構成となっている。また、東大寺三月堂（法華堂）をモチーフとして設計されていることが複数の資料から明らかとなった。ガラス障子、ベニヤ板など近代的な構法や材料を積極的に使用しながら、小屋組や付敷居、雨戸戸袋での中古の鉄骨補強においても金具類を現さないきめ細やかな処理が徹底されており、見え掛かり部分は伝統的な表現で統一することが特徴となっている。

外観上大きな変更としては、南広縁の高欄が半間ほど開放された箇所に木階を復した。近年、腐朽により撤去されていたが、縁束にはこの籔桁を受けた仕口及び圧痕が見受けられ、礎石も残っており、古写真から六級の木階であったことが確認出来た。

広縁高欄の栭束は架木に枘差となるが、架木上面に枘木口が現しとなっていた。周囲に鋲穴と圧痕が認められ、古写真でも笹形の飾金具を確認できたことから主屋の類例に倣い広縁高欄に飾金物を復した。

柱間装置に関しても、雨戸など外周部分を残し大半

本瓦葺屋根の竣工状況（北東より見る）

復原した南広縁の木階（南西より見る）

の建具類が主屋の地下室などに収納され、一部が欠失してしまっていた為、敷居、鴨居断面及び主屋等の類例から復旧または整備を行った。

また、東西の破風拝みの懸魚に飾金具を復した。懸魚見付面上部に六葉の風食痕が残り、止釘穴が際にあることから金属製の六葉と判断し、浜座敷が模したとされる東大寺三月堂と園内の主屋意匠を参照に復した。

本瓦葺屋根においては西面妻に降棟、南東隅棟に稚児棟、その他、各棟全てに鳥衾が設けられていたことが古写真と瓦の納まりから確認出来た為、当初の姿に復し、庇屋根についても修理前は西六畳西面庇屋根が野地板現し、南広縁西端戸袋屋根と南面及び東面広縁付鴨居上部が鉄板葺、南西隅庇屋根が板葺となっていたが、吊子等の痕跡に合わせて全て銅板葺に整えた。

以上が、今回の事業で行われた現状変更箇所の要旨である。そのほか浜座敷は広くとられた開口部において軒の垂下が顕著であったが、解体範囲を不用意に増やさないよう留意し、主要構造材を存置した状態で鉄骨補強材を挿入することにより、軒垂下を補正し、建具の納まりを復旧した。耐震診断結果の精査や耐震補強材の設置箇所の検討を含めて、修理技術者、構造担当者で慎重に協議をおこなうことによって、昭和初期の建物本来の状態を取り戻すとともに、開放的な建物の特質を損じることなく十分な性能を確保した構造補強を施し、可逆性を担保できた。

北冠木門

東池泉庭の整備と連動して大正後期に建設されたものと推定される。平成 11 年には門扉が新調され、同時期以降に袖壁が黒漆喰仕上げに改変された。

解体修理を行い虫害等が進んだ主要軸部材と化粧ベニヤ合板の天井板等を新調した。解体の過程で袖壁は戦後改変と考えられるラスモルタル下地で構成され、古写真や柱に残る痕跡から旧壁は卵漆喰仕上げであったことが判明した。漆喰塗を当初の卵漆喰に復し、仕上げは茶室に残る旧壁材の色目を参考に施工した。屋根瓦も不足分を当初材に倣い作成し、補足材と再用材の兼ね合いによって納まりや風合いに支障をきたさないよう配置を充分検討して葺き直した。

北冠木門の竣工全景（西より見る）

正門

大正期には主門柱を丸太材とした木造で設けられ、その後主門柱と門扉が鉄製、脇門柱が鉄筋コンクリートに整備されたが、昭和 17 年には主門柱をコンクリート被覆し、現在の姿に変更されている。門扉は戦時中の金属供出を経て戦後に新調されたものだが、その意匠は旧来のものに倣っている。今回の修理では、近年改変されていた主門柱頭部のガラス装飾を取り除き、柱表面の塗装を撤去し、戦前の小砂利洗い出し仕上げを現した。　（大給　友樹）

軒垂下補強材の組立状況（南東より見る）

正門の竣工全景（北より見る）

重要文化財　法音寺本堂の保存修理

建 築 年 代：康正３年・1457
所　在　地：有田郡有田川町岩野河
修理の種類：屋根葺替
修 理 期 間：2014.11 ～ 2015.03

旧茅材の解体状況

概要

法音寺本堂は有田川町の中央を西流する有田川の中流、岩野河地区に所在する。一重、寄棟造、茅葺の三間堂で、内部に附指定の厨子を置く。建立年代は棟札の写しにより康正３年（1457）とされるが、建立後の来歴は詳らかでない。天保９年（1838）の修理棟札が附指定となっており、その内容から外側縁廻りの修理を受けたことが知られる。大正６年に特別保護建造物に指定され、昭和２年に小屋組補強を主とする半解体修理が、昭和 29 年には屋根葺替修理が行われている。昭和 45 年に解体修理が行われ、その際に屋根形状や軒廻りが大きく改変されている。その後昭和 63 年の屋根葺替を経て現在に至る。また、所蔵の仏像が美術工芸品として重文に２体、県指定に１体、町指定に４体が指定されている。

事業の経過

前回の屋根葺替より 26 年が経過し、屋根茅が全体的に摩耗して一部では押竹も露出するなど、耐用年数を超過して葺替の時期に達していた。このため、茅葺屋根の全面葺替を行うべく、平成 26 年６月に事業の国庫補助金交付決定を受け、11 月より事業に着手した。着手後速やかに入札の手続きを進め、全国社寺等屋根工事技術保存会に登録している関西圏の茅葺き業者より５社を指名して入札を実施した。工事は落札者である美山茅葺 (株)（京都府・南丹市）が行い、12 月より素屋根の建設、翌１月より旧茅屋根の解体、野地の補修、茅葺きと進め、３月中旬に茅葺きを終え、その後仮設を解体して工事を完了した。

旧茅屋根は摩耗が著しく、一部が溝状に掘れていたものの、野地は概ね健全であったため、腐朽を来していた一部の小舞竹の取替と、緩んでいた縄の締め直しを行った。

屋根に使用されている茅材の大部分はススキであったが、軒付けの化粧（編み付け）と水切りにオギ（荻）が、平葺きの化粧にはシマガヤが用いられていた。前回修理時にこれらの材料が使用された意図は不明だが、材料の状態が非常に良かったため、軒付け化粧のオギは傷んだ先端を切り落として再用し、平葺きのシマガヤはそのまま再用した。新たに用意した茅材は請負者が手配した材料（熊本県阿蘇産）を使用したが、一部に地元の有志団体が事前に刈り込んで乾燥させていた生石高原のススキを使用した。　（結城　啓司）

平葺き施工状況

刈り込み状況

重要文化財　丹生都比売神社本殿の保存修理

建 築 年 代：室町時代、江戸時代中期、明治
所　在　地：伊都郡かつらぎ町上天野
修理の種類：屋根葺替・部分修理
修 理 期 間：2013.01 ～ 2014.12

当事業は平成 25 年 1 月より 24 ヶ月の工期で実施されおり、本年度は最終年度となる。これまでに本殿４棟のうち第一殿、第二殿の屋根葺替と塗装工事及び第二殿の建て起こし不陸調整が実施された。本年度はこれに引き続き、第三殿と第四殿の屋根葺替と塗装工事を行った。素屋根は第三殿と第四殿を共通で掛け、現状檜皮の解体後、現状塗装の掻き落とし及び塗装と、檜皮の葺替を並行して進めた。また、附指定で本殿内陣に安置されている宮殿の清掃及び彩色部分の剥落止めを行った。

塗装は昨年度の調査により仕様の変遷を解明し決定した、赤色塗装を軒回りを鉛丹、軸部を酸化鉄系塗料で塗り分ける仕様に基づき実施した。軸部の赤色塗装は木地の風化・劣化が顕著であるため、掻き落とし作業を慎重に行い、木部の損傷が最小限となるよう配慮した。一方で、昨年度に実施した第二殿軸部の塗装掻き落としでは、前回塗装の塗膜が残存していたことから今回の塗膜に悪影響を及ぼしたため、前回の塗膜の除去は慎重かつ確実に実施した。

11 月 15 日に正遷宮が行われ、予定通り 12 月末に全ての事業が完了した。　（結城　啓司）

屋根葺替が完了した第三殿（手前）と第四殿

重要文化財　旧西村家住宅の耐震診断

建 築 年 代：大正 3 年 (1914)
所　在　地：新宮市伊佐田町
事業の種類：耐震診断
事 業 期 間：2015.01 ～ 2015.03

旧西村家住宅は、大正 3 年に西村伊作自らが設計した洋風住宅の自邸で、昭和 2 年まで居住した後は、借家とされた時期、西村記念館として一般公開された時期を経て、平成 10 年からは新宮市が直接管理運営を担うなか、同 12 年に登録有形文化財となり、同 22 年には重要文化財の指定を受けた。

建物は、古写真などから部分的な改変も確認されるが、当初の給湯設備や電気設備などが現存するなど、形態を良く維持している。一部で基礎が沈下を起こし、土台や柱に蟻害が確認されるなど、破損も生じている。

そうした経緯のもと、平成 24・25 年度には保存活用計画を策定、同 26 年度からは耐震診断事業に着手し、同 28 年度からの保存修理事業に向けて準備を進めている。

本事業では、保存修理時に必要な構造補強を作案する上で、基礎部分や軸組部分の構造を十分に把握し、過去に実施された地盤調査結果もふまえた構造診断を行うための各種調査を実施した。当センターは、これらの調査に伴い一部先行分解が必要となる箇所について、その設定や分解時の立ち会い確認等を行った。

（下津　健太朗）

南西より建物外観を見る（左奥は旧チャップマン邸）

国名勝　玉津島神社本殿の保存修理

建 築 年 代：不明
所　在　地：和歌山市和歌浦中
修理の種類：屋根葺替
修 理 期 間：2015.01 ～ 2015.03

玉津島神社は、万葉の時代からの景勝地であり、和歌の歌枕としても広く知られる和歌山市和歌浦の奠供山東山麓に位置し、本殿はその中腹に建てられている。

一間社春日造の本殿は比較的小規模であるが、随所に彫刻や錺金具、蝋色仕上げの漆塗装が施された瀟洒な建物である。平成 4 年度に解体修理が実施され、この際に外周の漆塗装などが全面的に塗り替えられている。その後塗装の保護のため軒先に霧除けがかけられ、全体としては良好な状況で維持されているが、経年により屋根廻りの劣化が目立ってきたため、平成 26 年単年度事業として、檜皮葺替と箱棟及び千鳥破風の木部補修、漆塗装の塗り替え、錺金具の補修などを実施した。また、あわせて本殿背面の石垣の積み直しや土塀の補修など境内の整備工事が実施された。

前回根本的な修理が施されていることもあり、軒積や野地に大きな破損は認められず、檜皮の葺き替えは滞りなく進めることが出来た。箱棟木部も全面に黒漆が施されていたこともあり健全で、交差部に腐朽が認められた千木を 1 本取り替えたのみでほとんどの部材を再用できた。しかし一木で造り出された箱棟本体は、材の捻れが生じていたため、竣工後正面から見上げた際違和感が生じないよう留意して、千木、勝男木の納まりを調整した。　（多井　忠嗣）

竣工した玉津島神社本殿屋根廻り

国史跡　熊野参詣道史跡等保存整備 ～継桜王子跡社殿の保存修理～

建 築 年 代：江戸後期
所　在　地：田辺市中辺路町野中
修理の種類：塗装修理・部分修理
修 理 期 間：2014.12 ～ 2015.03

継桜王子は、熊野古道沿いの王子社の一つで、県指定天然記念物である「野中の一方杉」の足元に位置する、一間社隅木入春日造・銅板葺の社殿である。近くには「秀衡桜」や「野中の清水」といった名所も存在し、春から秋には参詣者が多く行き交う、中辺路の要所となっている。平成 12 年に「継桜王子跡」という名称で「熊野参詣道」の一部として国史跡に指定され、同 16 年にはユネスコの世界遺産に登録された。

社殿は近年、土台や柱下方で蒸れ腐れを生じて大きく傾くなど破損が進行していたため、「熊野参詣道史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業」として、木工事と塗装工事を中心とした保存修理に着手した。

木工事では、縁廻りを分解し、建物を揚屋した後、基礎の調整、破損部材の補修、建物の傾斜・不陸の修正などを行い、元の位置に据え戻し、最後に縁廻りを補修し組み立てた。

塗装工事は、木工事に続いて修理前の状況に合わせて塗り直す計画であったが、調査の結果、板壁の彩色部分を復原する方針に変更したため、追加調査や工程の面から、施工を次年度に先送りした。（下津　健太朗）

木工事の竣工状況（南西より見る）

国史跡　熊野三山史跡等保存整備
～熊野本宮大社神門ほか４棟の保存修理～

建 築 年 代：明治中期
所　在　地：田辺市本宮町本宮
修理の種類：屋根葺替修理・部分修理
修 理 期 間：2014.04 ～ 2014.09

熊野本宮大社では、平成 22･23 年度の社殿３棟（重要文化財）での保存修理事業に続いて、同 24 年度からは「熊野三山史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業」として、国史跡地内の建造物である、神門・築地塀、瑞垣・鈴門、神饌所の保存修理工事を進めて来た。今年度はその整備事業の締め括りとして、築地塀の左官工事と、３ヶ年度にわたる事業の内容を報告書にまとめる作業を実施した。

前年度に小舞下地の掻き直しと荒壁塗りまでを実施した築地塀では、中塗り、定規縁漆喰塗り、漆喰上塗りと進めて、左官工事を竣工した（巻頭写真８）。

今回の修理における調査では、柱や桁などの軸組部材が旧社地である大斎原での築地塀からの転用部材と判明するなど、明治 24 年 (1891) に遷座された現社地の正面を構える神門・築地塀（表紙下に正面図）の再建状況を知ることもできた。

報告書には、事業の経過や実施の概要、上記を含めた各建物での調査内容と、施工状況や各部仕様などの写真や図面などを掲載し、社殿をはじめ史跡地での将来的な保存整備の基礎資料とした。　（下津　健太朗）

築地塀の漆喰塗り施工状況（東側を南東より見る）

国史跡　金剛峯寺伽藍中門の再建工事

建 築 年 代：中世（復元）
所　在　地：伊都郡高野町高野山
修理の種類：再建
工 事 期 間：2011.04 ～ 2014.11

弘仁７年（816）に弘法大師空海が高野山を開創し 1200 年の節目となる平成 27 年に、記念事業として伽藍中門が再建された。中門は当初、金堂前の壇上に華表（鳥居）として設けられ、その後門形式となり、現在の位置に移された。その間何度も焼失と再建が繰り返され、天保 14 年（1926）に６代目の中門が焼失以後は再建されず、跡地には礎石のみが残されていた。

再建計画作成に先立って行われた発掘調査により、同位置で３度の建設と焼失があり、礎石と雨落ち溝位置からいずれも同規模と判明。高さは焼失時に救出され残存する二天像が目安とした。また、絵図等の史料より、五間三戸楼門型式で、屋根は檜皮葺、扉はなく、全体が赤く塗られていたことが判明する。

今回の再建計画案は、現位置で最初に建てられた建長５年（1253）を様式的基準とした。細部意匠や比率などは、比較的時代や地理的要因が近い丹生都比売神社の楼門（明応８・1499）を参考とした。

センターは平成 19 年度から開始した基本計画の作成に始まり、20，21 年度には実施計画の取り纏め、23 年度から開始された本体工事の監理業務を受託した。

（結城　啓司）

竣工した中門

国登録文化財 旧橋本本陣池永家住宅の保存修理

建 築 年 代：主屋　享保 16（1731）以前
　　離座敷、表門、土蔵　江戸後期
所　在　地：橋本市橋本
修理の種類：屋根葺替・部分修理
修 理 期 間：2014.11 ～ 2016.03

池永家住宅は、旧伊勢街道（国道 24 号線）に面した商家であり、江戸後期には藩主の宿泊や休憩に利用されるなど、旧名手本陣妹背家住宅（重要文化財　紀の川市）とともに、紀州藩の本陣の遺構として重要な建物である。

街道に面して主屋、表門、土蔵が並び、庭を介して敷地南側に離座敷が建つ。敷地は街道と紀ノ川に挟まれ、川に面した南側に贅をこらした離座敷を設ける明治時代以前の類例が周辺にも散見されたが、再開発とともに池永家に残るのみとなった。池永家の離座敷は本陣として利用された建物で、紀ノ川に臨む南側に、それぞれの側面に床を構えた座敷二室を配する構成が特徴的である。

今回の事業は、国道拡幅に伴う市街地再開発により敷地が南側にセットバックすることとなり、登録された建物全ての曳家が必要となったことにあわせ、保存修理を実施するものである。

平成 26 年度においては、曳家を実施するために表門を一旦解体し、主屋、離座敷も中古に増築・改築された部分を解体したほか、曳家に伴い各建物の足下の補修などを進めた。また、曳家が先に完了した土蔵、離座敷の破損調査や痕跡調査を行った。（多井　忠嗣）

主屋の曳家実施状況（北東より見る）

県指定文化財 総持寺総門・鐘楼の保存修理

建 築 年 代：総門　宝暦 11（1761）
　　鐘楼　寛永 15（1638）
所　在　地：和歌山市梶取
修理の種類：総門　半解体修理　鐘楼　解体修理
修 理 期 間：2015.02 ～ 2017.08

総持寺は、県内における浄土宗西山派の拠点であり、梶取本山とも呼称される。本堂、総門、鐘楼の三棟が県の文化財に指定されており、今回は総門と鐘楼の修理を実施している。

平成 26 年度においては、総門の本瓦葺屋根、野地および両脇の塀を解体し、軸部の建て起こしや小屋組の補修を進めるとともに、補強方法などを検討した。

鐘楼は全解体したが、総門の修理完了後に補修工事を進めるため、解体部材を一旦倉庫に仮保管した。解体に伴う調査により、鐘楼梁材上部より棟札が発見され、鐘楼の建立時期が梵鐘の鋳造された寛永 15 年であることが確認できた。（多井　忠嗣）

総門修理前（南東より見る）

総門小屋組の修理と補強（南面）

和歌山城三の丸で出土した桑山期の瓦

和歌山城は1585年に羽柴秀吉の命令で縄張りされ、翌年から桑山家が実質的な城主（城代）として1600年まで統治した。桑山家の家紋である桔梗紋の軒丸瓦は桔梗の花弁が接するタイプと独立するタイプの瓦があり、天守台付近で出土している。また、三の丸跡の現裁判所付近では、かつて金箔貼りの桔梗紋軒丸瓦が出土したという話が伝わっている。

平成23年度に当センターでは裁判所建て替えに伴う発掘調査を行い、花弁が接するタイプの桔梗紋軒丸瓦の破片が1点出土した（『和歌山城跡』2015、の報告書№865=1）。この瓦は復元径約14.0㎝、外縁がやや歪んだ瓦質焼成であり、1区⑧-3トレンチ56土坑の下半部で出土している。周辺には桑山期や浅野期の遺構面は無く、徳川期の遺構に上半部を削られた土坑として認識される。

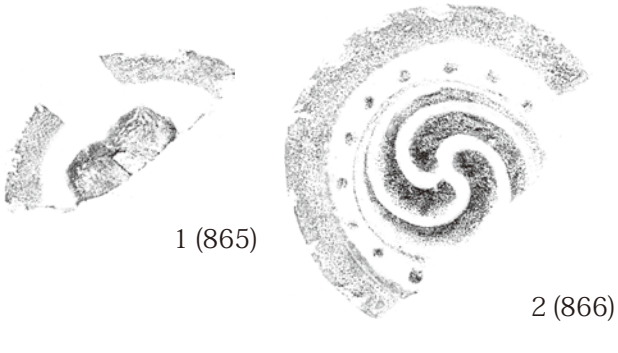
この土坑で共伴した主な瓦として、巴紋軒丸瓦（報告書№866=2）と水切り付平瓦（915）がある。2は瓦当面に離れ砂が多量に付着した径16.0㎝の瓦で、巴の尾が伸びて圏線状に繋がる。915は凹面に水切りと釘穴をもち、離れ砂が多量に付着する。

平瓦は次のA～F類の6種類が出土しており、そのうちA～D類は凹凸面に離れ砂が多量に付着するものである。A類は厚さ約2.2㎝で瓦質焼成、表面は灰白色、断面は暗い灰色となる。2を含む14点が出土した。B類は厚さ約2.3㎝で瓦質焼成、表面灰色、断面灰白色。5点は凹面を部分的に不定方向ナデ、2点は全面ナデ。平瓦C類は厚さ約1.9㎝で凹面ナデ。瓦質焼成で、表面・断面ともに薄い灰色。胎土はやや粗い。21点出土。平瓦D類は厚さ1.8㎝で、糸切り痕（コビキA）あり。須恵質焼成で、灰色硬質。1点出土。平瓦E類は厚さ2.0㎝で凸面離れ砂、凹面ナデかミガキ。灰色で須恵質焼成。1点出土。平瓦F類は厚さ2.0㎝で凹面布目と斜め方向にコビキ痕らしきものがあり、凸面はユビオサエとナデ。瓦質～須恵質焼成。1点出土。縁が水切り状に盛り上がっている。D類とF類は桑山期の早い段階の瓦と考えられる。

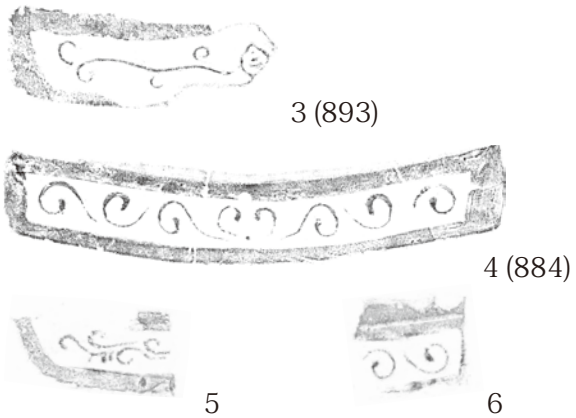
丸瓦は厚さ約1.7㎝で3点しかなく、凹面布目、凸面ナデかミガキ。瓦質焼成で灰色。胎土はやや粗い。

周辺では、桑山期・浅野期の軒平瓦が出土している。これらの軒平瓦は瓦当面に離れ砂が付着し、大半は調査区の西側で出土した。宝珠唐草紋軒平瓦（893=3）は唐草が繋がり、側縁が狭く、桑山期の瓦と推測される。1点出土。均整唐草紋軒平瓦（884=4）は側縁が狭く、瓦質焼成で、表面は薄い灰色、断面は濃い灰色。13点出土。そのほか唐草紋軒平瓦の破片（5・6）が1点ずつ出土している。5は3より少し大きめの唐草が離れて反転する。6は4と唐草の向きが異なり、瓦当面が笵型より大きい。表面が欠けるが、4より幅広の右側縁があり、浅野期の瓦の可能性が高い。

桑山期の遺構・遺物は断片的であるうえに、摺絵御深井釉水注（694）のような桑山期より新しいと考えられる桔梗紋をもつ陶器の存在や、同時期の紀州徳川家の三葉葵紋鬼瓦の出土もあり、城下町形成期の様相は複雑である。屋敷の具体的な姿に迫るのは難しいが、桔梗紋軒丸瓦を含む一群の瓦は、現在の裁判所付近に建っていたと考えられる桑山家の屋敷について検討できる数少ない資料の一つである。破片ばかりではあるが、特徴的な技法と瓦当紋様から年代が類推される貴重な資料群なので、ここで紹介した。　（丹野　拓）



桑山期の軒丸瓦



桑山期頃の軒平瓦

重要文化財
琴ノ浦温山荘浜座敷保存修理工事
―大正期の化粧ベニヤ合板とその補修―

はじめに

大正から昭和初期に建てられた近代建築である温山荘園の各建物には多様な合板が使用されており、その表現や用途が大きな特徴となっている。創設者である新田長次郎は、温山荘園の造営と並行して近代的なベニヤ工場を開設し、その可能性を模索した。

本稿では国内でのベニヤ合板製造の歴史を紹介し、温山荘園に用いられた化粧ベニヤ合板の歴史的な価値付けを行うとともに、文化財を構成する部材としての保存の取り組みを報告する。

国内の合板製造の沿革

①突板を膠などで貼り合わせる合板は、正倉院の所蔵の工芸品にもその技術が確認できる。

②建築用材としては、江戸期より数寄屋等に用いる銘木材として突板を貼り合わせた天井板などが製作されていた。総じて幅の狭い材であり、職人による手作業で作られていたものと推定される。

③ベニヤ合板の国内における工場生産は、明治四十年にロータリー方式による単板製造機が発明されたことから始まる。当初輸出用茶箱などを安価に大量生産することが主目的であった。

④大正時代には、各地に欧米から輸入したベニヤ合板製造機械を配した近代的工場が建設される。軍需に加え、北海道産広葉樹などの有効利用やミルクカゼインの輸入開始に伴い、安定した工場生産がようやく確保され、ベニヤ合板製造自体が工業の一分野として飛躍的に発展する。また、欧米からフラッシュドアなど合板技術を応用した新たな製造技術が導入され、ベニヤ合板が高級内装材として認知されはじめる。

⑤大正 12 年の関東大震災からの復興資材として、ベニヤ合板の大量消費材としてのイメージが定着。その後継続して軍用材製造のための技術開発がおこなわれ、戦後の発展の基礎が蓄積される。

⑥第 2 次世界大戦後、復興需要とラワンなどの南洋材の輸入開始も重なり、粗製乱造の時期が続く。しかし高度成長期を迎えて品質、輸出量ともに世界最高水準の生産国として発展し、現在にいたる。

工業的化粧ベニヤ合板の特徴

温山荘園が造営された大正期は、明治後期に勃興したベニヤ合板製造が近代的な工業の一分野として確立していった時期に相当する。浜座敷、主屋建立時に使用されている合板は、大正 9 年を境に大きく仕様が異なる。大正 4 年までに天井板として使用されている合板は 420㎜幅の長尺材で、納まりや化粧材の樹種・木目も含め、近世以前の無垢板の天井と一見したところでは見分けがつかない。そして芯材には柾目の一枚板

天井に張られた春日杉の化粧ベニヤ合板天井板

が木目の通りを化粧板と揃えて用いられており、職人による経師工事の延長上のものと考えられる。

一方、大正 9 年以降に使用されているベニヤ合板は 900㎜前後の幅広材であることが特徴的で、大正 8 年創業の新田ベニヤ製品が試験的に使用されたものと考えられる。主屋寄付六畳間天井の春日杉笹杢板が、幅 900㎜・長さ 1,800㎜強の寸法で貼り込まれているさまは、伝統建築ではあり得なかった新たな表現を形成している。

浜座敷の西六畳に使用されているベニヤ合板も同様の寸法であり、化粧面には檜笹杢材の挽き材が用いられている。また南西便所の手洗い部分天井には幅 1,110㎜のタモ玉杢材が使用されており、化粧面単板に希少な銘木の幅広材が惜しげもなく用いられている点が大きな特徴となっている。幅広の無垢板は割れや反りが生じやすいため、幅広材を天井板に用いることは、大正後期になって工業的に精度の高いベニヤ合板が作成できるようになって初めてなし得た表現とも考えられる。実際大正 9 年に建てられた茶室の北廊下天井では、浜座敷西六畳と同じベニヤ合板を木目と直交する方向に湾曲させ、ボールト状に貼り込むという、無垢板ではなし得ない表現も行われている。

また、温山荘園で用いられているベニヤ合板には、当時単板製作の主流であったロータリー方式ではなく、ソード方式で加工された材が用いられている。ロータリー方式は小径の原木から幅広の材を効率よく生産できるが、木目が不自然に広がったり、スチームで蒸す工程を経るため変色し、従来の木目や木地を生かした化粧材としての使用には不向きな加工方法である。これに対しソード方式は丸鋸による挽き材として単板を製作するため、原則無垢材と同等の化粧面を確保できる。しかし幅広材を製作するには大径材の原板を用意する必要があり、歩止まりも悪い。大正初期までは、楽器用など比較的小さな合板製作に限られた製法であったが、これを応用したのが温山荘園における新田ベニヤ製合板である。大正２年時の合板を無垢材の精巧なレプリカと見れば、大正後期のベニヤ合板は、工業製品が伝統技法の表現を超え、近代固有の意匠を創出した新たな素材として評価すべきものと考えられる。

温山荘園における新製品のテスト

当時のベニヤ合板には克服すべき欠点も少なからずあったようで、その最たるものが耐水性の問題であった。温山荘園においても大正期に建てられた建物では、原則雨がかりとなる外周にはベニヤ合板が用いられてはいない。しかし大正末期には新田ベニヤが接着剤の耐水化に関する特許を取得し、昭和三年に建てられた伴待部屋においては、外壁にも欅を化粧材としたベニヤ合板が使用されるにいたるのである。さらにその幅が 450㎜とこれ以前のものと比べると狭くなっている。必ずしも格式が高くない建物の内外装に惜しげなく使用されている様子を踏まえると、大径材原板の確保に伴うコストを抑えることにより、より普遍的な用途の提案と販路の拡大を図ったものと推察され、新たな段階に化粧ベニヤ合板が進んだことを示している。

この他、北冠木門においては浜座敷や主屋と同様に、表板に最大で幅 820㎜のソード方式によるタモ材が使用されている。ただし同等の材は、他のベニヤ合板の裏板などにも使用されていることから、必ずしも銘木としての扱いではなかったものと見られる。一方北冠木門に使用されているベニヤ合板には、他の合板と明らかに異なる特徴が認められる。温山荘園において大正期から昭和初期に使用されたベニヤ合板には、化粧単板にこそ個別に特徴的な木材が使用されているが、合板としての仕様は３層構造で総厚が 6.0㎜と共通している。

これに対し、北冠木門においては化粧野地板が５層構造で合計 9.0㎜、天井板においては７層構造で合計 12.6㎜となっている。この理由を示す資料等は確認されていないが、数寄屋風の瀟洒な門である北冠木門には桟瓦屋根に銅板葺きの庇が付き、建物に比して軒は深い。しかも軒には 40㎜径ほどの杉丸太の垂木が疎らに配されるのみである。また天井も柱通りと棟通りがずれているのにもかかわらず、小屋組は天井板の上に直接置かれる納まりであり、これらに配するベニヤ合板に構造的な性能を期待していることは明らかである。既に飛行機などに構造材としても利用されていた合板の技術を化粧材にも兼用させたことは、近代実業家としての合理的発想の産物と考えられ、近世からの職人技として作成されていたものとは明らかに異なる位相に合板の価値を構築したものと言えよう。

大正期の化粧合板の文化財修理

今回修理事業を実施した浜座敷において、化粧ベニヤ合板が計３枚、雨漏れにより大きく破損していた。

これまで述べてきたように、いずれも現在入手することが不可能と思われる幅広の銘木が化粧単板に使用されており、複数枚の板材で構成する天井面において、一部のみを代替品とすることは、建物の文化財としての価値を大きく損なうものと判断した。このため、合板を構成する単板を一層ずつ丁寧に分解し、割れや反りが生じていたものの、欠損することなく全体が残っていた化粧単板と裏板は再用し、芯材のみを新調して再度張り直すことにより、大正期の化粧ベニヤ合板の保全を図った。　（多井　忠嗣）

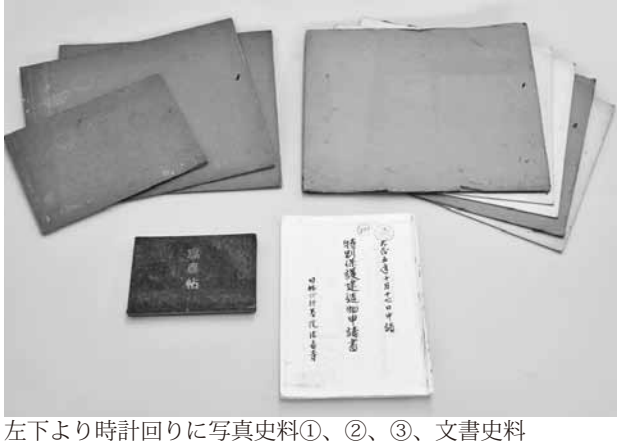
化粧ベニヤ合板の補修：単板の分解作業

重要文化財法音寺本堂保存修理工事
―史料紹介と考察―

はじめに

法音寺本堂保存修理工事の実施にあたり、関係者より古写真等の史料の提供を受けた。文化財修理を受ける以前の姿が判明する非常に貴重な資料であるため、ここに紹介する。

加えて、この史料と既知の資料より本堂の棟形状の変遷を辿ることが出来たため、ここに報告する。



左下より時計回りに写真史料①、②、③、文書史料

写真史料

写真史料①はジャバラ式アルバムで、奥書より大正元年に撮影されたものと判明する。内容は寺院の概要を示しており、岩野河地区の遠景や、本堂の外観、所蔵の仏像、住職の写真が納められている。大正初期の地区の景観や本堂の様相が判明し、非常に貴重である。

写真史料②は３枚の写真からなり、裏表紙の記述より大正 13 年の撮影と知れる。それぞれ本堂の全景、背面の屋根、同軒下を写すが、当初は他に数枚が存在したと推測される。大正元年の写真と比較すると、押さえ竹が露出するなど、茅の摩耗が明らかに見て取れる。本堂は大正６年に特別保護建造物となり、大正 15 年に保存修理が始まっていることから、屋根葺替の計画と何らかの関係があるように思える。

写真史料③は５枚の写真で構成される。撮影年は不明だが、大正 13 年の写真と比較すると、同じ屋根で少し時間を経過した状態と推定される。また写真は建物の特徴をよく表す建築写真であることや、写真内に「特別保護建造物法音寺本堂修理工事出張所／和歌山県」と書かれた看板が写り込んでいることから、大正 15 年に始まった修理工事の修理前写真と推定した。

特別保護建造物指定の前後と、初めての文化財修理前の写真が揃って確認でき、それら全てに全景写真が含まれることから、この時期の建物の様子や修理の経緯などを知る上で、非常に貴重な史料と言える。

文書史料

表紙に「特別保護建造物申請書／大正五年十月十七日申請」と記されており、大正６年４月５日に特別保護建造物となる際の申請書の所有者控え分の複写とわかる。内容は「副申書」「本堂平面図」「御上申書」「境内の見取り図（絵）」「由来」「縁起書」で構成される。宛先を「文部省関野工学博士殿」と一旦書いたものを二重線で訂正し、「文部大臣岡田良平殿」と書き直している。関野工学博士は関野貞と考えられるが、関野貞が法音寺の特別保護建造物指定に深く関与していることを示唆され、興味深い。

写真史料①より　大正元年の本堂全景（部分）

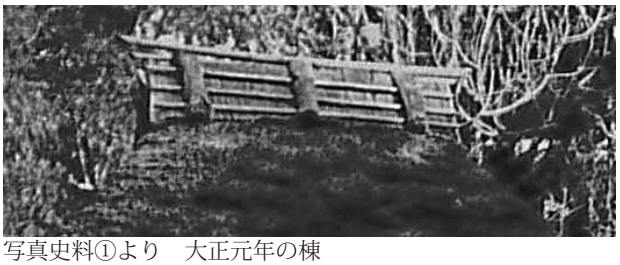
写真史料③より　大正 15 年本堂修理前写真

棟の納まり変遷の概要

本堂は大正６年の指定以降、同 15 年に解体修理、昭和 29 年に屋根葺替（災害復旧）、同 45 年に解体修理、同 55 年に維持管理工事、同 63 年に屋根葺替が行われている。また、昭和 45 年の解体修理では現状変更が行われ、軒廻りや小屋組、屋根形状が大きく変更されている。修理工事報告書や修理記録に加え、今回発見された写真史料を元に、棟の納まりを辿った。

大正修理以前の棟の納まり

屋根の摩耗状況より、明治後期から末期頃の施工と推測できる。棟押竹は片側３本、針目覆いは３本、棟木は竹となっている。摩耗のため判別しづらいが、品軒も段差が付けられているように見える。針目覆いの下端は品軒とほぼ同位置。



写真史料①より　大正元年の棟

昭和 29 年葺替後、昭和 45 年修理前の棟の納まり

昭和 45 年の修理前写真のため、葺替より 16 年が経過し、摩耗が進んでいる。棟木は竹だが大正期より細い。屋根全体の形状に大きな変更はないことから、棟も大正期から大きな変更はないと推測できる。

修理工事報告書より　昭和 45 年修理前の棟

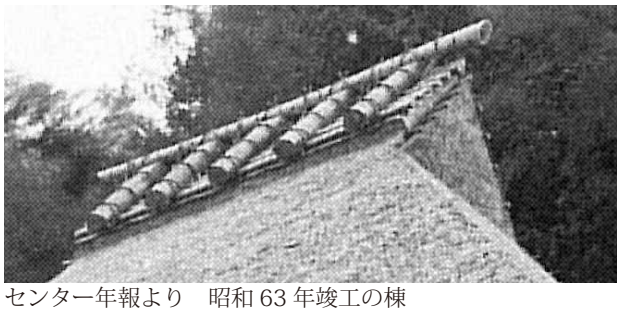
昭和 45 年修理後、昭和 63 年葺替前の棟の納まり

現状変更で屋根形状が大きく変わり、棟の納まりも変更された。棟木が木製になり、棟押竹は片側５本、針目覆いも５本に増えた。針目覆いは増えたが、棟長さは長くなっておらず、間隔を狭めて対応している。針目覆いの下端は品軒より上方。

修理工事報告書より　昭和 45 年竣工の棟

昭和 63 年葺替後、現在までの棟の納まり

棟木は竹に変わった。針目覆いは５本のまま。下端は品軒より下方。写真では判りづらいが、棟長さが昭和 45 年施工時より１m程度長くなっている。また、トムネ（棟両端の一段落ちた部分）には木製の板が取り付く。



センター年報より　昭和 63 年竣工の棟

棟の納まりの変遷のまとめ

現状変更により屋根形状は大きく変わったが、棟長さにはほぼ変化がない。針目覆いは字の通り棟積みを縫う「針目」を「覆う」ための装置であることから、必要な針目の数に規定されるべきで、棟長さが変わらずに数が増えることに違和感を禁じ得ない。針目覆いが増えた理由は不明だが、「近世においては針目覆いの数は庄屋，平百姓，小作農民等階層の上下によって決められており，多いほど家格が上」（建築大辞典）とされていたことと無関係ではないように思われる。

今回の修理工事では針目覆いを３本にする案も検討したが、「針目覆いの数を変えることは現状変更に相当する」との回答が文化庁よりあり、今回は変更を見送り、現状修理となった。茅葺きは特に棟廻りの意匠に地方色が豊かで、茅葺き屋根の印象を左右する重要な役割を果たすが、地域に根ざす職人が途絶え、文化財修理が一般的となった昨今、一筋縄ではいかない複雑な問題を孕んでいる。　（結城　啓司）

平成 26 年度の普及活動

・普及活動の概要
・報告会・シンポジウム
　和歌山県内文化財調査報告会「地宝のひびき」
　公開シンポジウム「熊野三山の考古学
　－発掘調査から見た信仰の始まりと展開－」
　公開シンポジウム「和歌山城と城下町の風景」
・和歌山県内埋蔵文化財調査成果展
　「紀州のあゆみ」
・現地見学会
　「歩いて知るきのくに歴史探訪
　～藤白神社から琴ノ浦温山荘園までを巡る～」
・発掘調査現地公開
　「立野遺跡」、「川辺遺跡」、「木津遺跡」、
　「根来寺遺跡」
・出前授業　「和歌山市立川永小学校」
・埋蔵文化財発掘調査概要パンフレットの作成
・既刊報告書の電子書籍化
・文化財建造物に関する普及活動
　「見て知る伝統技術」
　「名手本陣アカデミー」
　「法音寺の歴史と文化」

普及活動の概要

平成 26 年度の普及啓発事業として埋蔵文化財関係では 12 件の事業を実施した。このうち、文化財調査報告会、公開シンポジウム 2 本、埋蔵文化財調査成果展、現地見学会、埋蔵文化財発掘調査概要パンフレットの作成、既刊報告書の電子書籍化は、国庫補助金を受けて実施した。また、県内の各発掘調査現場において現地公開を開催した。

このほか、情報誌「風車」の刊行や、各事業において資料集やマップ等を作成し、参加者及び周辺自治体、研究機関等に配布した。

文化財報告会　「地宝のひびき」

平成 26 年 7 月 13 日に和歌山県立図書館（きのくに志学館）2 階講義研修室において、前年度の文化財調査の成果を県民の皆様に知って頂くため、和歌山県内文化財調査報告会と題して開催した。発表は、「古墳時代から江戸時代にかけての調査－戦国時代の濠跡を中心に　和歌山市鷺ノ森遺跡－」井馬好英氏（（公財）和歌山市文化スポーツ振興財団）、「武家屋敷群の風景を復元する－和歌山城跡の発掘調査成果－」高橋智也（当センター）、「和歌山県下初の埴輪窯発掘－和歌山市平井遺跡・平井Ⅱ遺跡の発掘調査－」山本光俊（当センター）、「東家遺跡・東家館跡の発掘調査」大岡康之氏（橋本市教育委員会）、「小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡の発掘調査」川崎雅史（当センター）、「長保寺における修理と瓦の調査」下津健太朗（当センター）であった。また、受付では、センター刊行物の配布等も行なった。参加者数 100 名であった。

地方のひびき　会場風景

公開シンポジウム「熊野三山の考古学」

平成 26 年 11 月 22 日に田辺市文化交流センター（たなべる）2 階大会議室で開催した。これまでのシンポジウムの多くが、和歌山市内をはじめとする紀北地域での開催であったことから、紀南地域の開催となった。テーマは世界遺産登録が 10 周年となる「紀伊山地の霊場と参詣道」との関連から、熊野三山のひとつである那智大社周辺の遺跡を紹介した。

基調講演では辻林浩氏（和歌山県世界遺産センター

熊野三山の考古学　討論の様子

長）に「熊野三山の考古学」と題して講演をいただいた。発表は、「那智山坊跡の調査」佐伯和也（当センター）、「藤倉城跡の調査」黒石哲夫氏（和歌山県教育委員会）、「川関遺跡の調査」村田弘（当センター）で、発表の後、討論として出土遺物から遺跡の消長や時代背景、更には土器などの流通について考えた。参加者数は 37 名であった。

公開シンポジウム「和歌山城と城下町の風景」

平成 27 年 3 月 8 日にイオンモール和歌山 3 階イオンホールで開催した。 記念講演として松尾信裕氏（大阪歴史博物館）に「織豊期城下町の出現と展開」について発表していただき、高橋智也（当センター）が「和歌山城の内と外ー和歌山城下の基礎知識」、額田雅裕氏（和歌山市立博物館）が「名所図会にみる和歌山城・城下町の風景」、北野隆亮氏（（公財）和歌山市文化スポーツ振興財団）が「紀州藩主屋敷の景観ー文献にみる二の丸大奥の発掘調査成果からー」、高橋克伸氏（和歌山市立博物館）が「紀州藩主屋敷の景観ー文献にみる二之丸大奥の穴蔵についてー」、丹野拓（当センター）が「遺跡にみる三の丸武家屋敷の風景」、西村歩氏・井馬好英氏（（公財）和歌山市文化スポーツ振興財団）が「鷺森御坊・寺内の成立と和歌山城下町の形成ー鷺ノ森遺跡の発掘調査成果からー」について報告を行った。パネルディスカッションでは和歌山城周辺の発掘調査成果と文献史学等の分野を併せて、和歌山城と城下町の風景が現段階でどのように復元できるについて討論した。シンポジウム会場内では、発表に関する出土遺物の簡易展示も行った。参加者は 230 名と大盛況であった。

和歌山城と城下町　会場風景

和歌山県内埋蔵文化財調査成果展　「紀州のあゆみ」

近年の埋蔵文化財調査成果をまとめ、和歌山県立紀伊風土記の丘、御坊市歴史民俗資料館、田辺市立歴史民俗資料館の 3 会場で巡回展示した。平成 25 年度に発掘調査を行った遺跡の速報展示を中心に、県指定文化財に新規指定されたものの紹介も行った。展示室には、展示遺跡に関係する発掘調査報告書の閲覧コーナーを設け、発掘調査成果がどのようにまとめられているのかについての参考資料とした。紀伊風土記の丘会場は平成 26 年 9 月 9 日から 9 月 28 日の期間で見学者は 412 名、御坊市会場は平成 26 年 11 月 18 日から 12 月 7 日の期間で見学者は 182 名、田辺市会場は平成 27 年 1 月 27 日から 2 月 15 日の期間で見学者は 352 名であった。また、見学者に直接展示解説を行う機会として、各会場 1 回ずつ、当センター職員によるギャラリートークを実施した。各会場とも 7 ～ 14 名程度の参加があった。

紀州のあゆみ　展示風景

歩いて知るきのくに歴史探訪

海南市藤白神社から琴ノ浦温山荘園までの周辺の文化財等について説明したマップを作成し、平成 26 年 10 月 25 日にそれを片手に現地で解説を行いながら歩き、見学を行った。藤白神社では本殿の解説を当センター文化財建造物職員が行い、藤白王子権現本堂本地仏・藤白神社境内社・鈴木屋敷・熊野一の鳥居跡などを藤白神社の吉田宮司に解説していただいた。周辺の遺跡などの解説は当センター埋蔵文化財課職員が行った。琴ノ浦温山荘園では、園内を解説しながら歩き、主屋は琴ノ浦温山荘園園長の田中氏に、庭園は当センター埋蔵文化財課職員、浜座敷・茶室は当センタ

歩いて知るきのくに歴史探訪　温山荘での説明

根来寺遺跡　現地公開風景

一文化財建造物課職員が行った。当日は、21 名の参加者があった。

発掘調査現地公開

遺跡の発掘調査成果を広く一般の方々に周知するため、発掘調査の現地公開を開催した。

各現場の発掘調査担当者による遺跡の解説のほか、出土遺物の展示等を行い、地元の方を中心に多数の参加者を得ることができた。現地公開を開催した遺跡と開催日および参加者は、立野遺跡（平成 26 年 7 月 19 日）30 名、川辺遺跡（平成 27 年 1 月 17 日)40 名、木津遺跡（平成 27 年 2 月 8 日）40 名、根来寺遺跡（平成 27 年 3 月 5 ～ 7 日）43 名である。

木津遺跡　現地公開風景

川辺遺跡　現地公開風景

出前授業

平成 26 年 5 月 12 日に和歌山市立川永小学校で 6 年生を対象に出前授業を行った。

授業では、小学校周辺の遺跡や地元の歴史を紹介し、実際に土器を手にとって観察などの授業を行った。また発掘調査を行う理由や、調査を行うことで分かってくること等を解説・説明を行った。

埋蔵文化財発掘調査概要パンフレットの作成

(財) 和歌山県文化財センター、又は (公財) 和歌山県文化財センターが発掘調査を実施した遺跡のなかで、大部分、または主要部分について発掘調査を行った遺跡、発掘調査によって大きな成果が得られている遺跡を選び、本年度は、西日本最大級の縄文時代の竪穴建物がみつかった中飯降遺跡（かつらぎ町）のパンフレットを一般向けに作製した。パンフレットはＡ４版縦型で、Ａ３用紙２つ折りで製本した。

既刊報告書の電子書籍化

平成 23 年度より、（財）和歌山県文化財センターで及び（公財）和歌山県文化財センター過去に刊行した発掘調査報告書の公開・活用促進を目的として既刊報告書の電子書籍化を行っている。本年度は 2005 年度に編集・発行した「楠見遺跡発掘調査報告書」と「高田土居城跡・徳蔵地区遺跡・大塚遺跡発掘調査報告書」の２冊を対象として実施した。

文化財建造物に関する普及活動

文化財建造物関係では、保存修理現場の見学会等の開催に協力した。

「見て知る伝統技術」

公益財団法人和歌山県文化財保護協会主催で毎年実施している文化財公開事業として、9月28日に琴ノ浦温山荘園で大正から昭和初期に建てられた重要文化財建造物の見学会にて現地説明を行った。

主屋内部において、広く取られた開口部やガラスが使われた建具の多用による開放的な空間構成、化粧ベニヤ合板が使われた天井など、近代和風建築としての特徴を解説した。その後、仮設の外周からではあるが浜座敷の修理現場や茶室を見学して貰った。

浜座敷の修理現場見学状況

「名手本陣アカデミー」

紀の川市の旧名手本陣は、主屋など三棟が重要文化財に指定され、旧郡役所部分を含め敷地全体が国の史跡に指定されている。当センターは平成5年に重要文化財建造物保存修理の設計監理、平成23年に史跡の整備事業として土塀補修の技術指導などを行っている。

重要文化財旧名手本陣妹背家住宅内での講演風景

今回は紀の川市主催の講演会事業の一環で行われたもので、本陣建築としての特徴を、旧橋本本陣池永家住宅や藩主が休憩できるように整えられた旧中筋家住宅などの類例とともに紹介した。　（多井　忠嗣）

「法音寺の歴史と文化」

法音寺本堂の保存修理事業に関連して、有田川町教育委員会主催で「第7回いにしえの有田歴史講座・法音寺の歴史と文化」が平成27年2月28日に開催された。講座では、岩倉公民館にて「法音寺の歴史と仏像」と題して大河内智之氏（和歌山県立博物館）が、「法音寺の建築的特徴」を多井が、「法音寺の建物修理」を結城がそれぞれ講演し、その後本堂修理現場に場所を移して現場見学会が行われた。

現場見学では平葺きが完成し、棟廻りを施工途中の茅葺き屋根を足場の上から見て頂き、解説を行った。また、本堂内部や茅葺き道具なども併せて見て頂いた。

講演会には事前の予想をはるかに上回る100名を優に超える参加者があり、当地域がいかに魅力のある歴史や文化を内包しているのかを、改めて実感した。

（結城　啓司）

法音寺本堂の現場見学会の様子

（公財）和歌山県文化財センター　平成 26（2014）年度　概要

Ⅰ　受託業務

埋蔵文化財発掘調査等受託業務	10 件
埋蔵文化財遺物整理等受託業務	5 件
文化財建造物保存修理技術指導業務等	17 件

Ⅱ　理事会・調査委員会・会議など

理事会・評議員会

理事会	26.06.04	アバローム紀の国
評議員会	26.06.20	和歌山ビッグ愛
理事会	26.11.21	アバローム紀の国
理事会	27.03.25	アバローム紀の国

調査指導

中世末期から近世初頭の陶磁器の産地・年代について（和歌山地家簡裁整理業務）松尾信裕　大阪歴史博物館

埋蔵文化財関係

全国埋蔵文化財法人連絡協議会関係

第 35 回全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会	26.06.19、20	主催：（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
平成 26 年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会	26.11.27、28	主催：（公財）元興寺文化財研究所

近畿ブロック主担者会議等

平成 26 年度第 1 回(第 49 回)全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議	26.07.04	主催：（公財）八尾市文化財調査研究会
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック勉強会	26.09.19	主催：（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
第 29 回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議	26.11.21	主催：(公財)京都市埋蔵文化財研究所
平成 26 年度第 2 回(第 50 回)全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議	27.02.13	主催：（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
平成 26 年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議	27.02.20	主催：（公財）大阪市博物館協会
平成 26 年度第 1 回全埋協近畿地区コンピュータ等研究委員会	26.06.23	主催：（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
平成 26 年度第 2 回全埋協近畿地区コンピュータ等研究委員会	27.03.11	主催：（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
「関西考古学の日 2014」スタンプラリー	26.09.01-26.11.30	主催：「関西・考古学の日」実行委員会（全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック）

文化財建造物関係

平成 26 年度重要文化財建造物保存修理事業等監督者会議	26.04.14	主催：文化庁
平成 26 年度文化財建造物保存事業幹部技術者研修会	26.04.15	主催：（公財）文化財建造物保存技術協会
平成 26 年度文化財建造物保存事業中堅技術者研修会	26.05.12-15、06.09-12	主催：（公財）文化財建造物保存技術協会
平成 26 年度文化財建造物修理主任技術者講習会（普通コース）	26.08.20-29	主催：文化庁
平成 26 年度文化財建造物保存修理関係者等連絡協議会	26.10.14	主催：文化庁
平成 26 年度文化財建造物保存事業主任技術者研修会	26.10.15-16	主催：（公財）文化財建造物保存技術協会
和歌山県博物館施設等災害対策連絡会議	27.02.10	主催：会議事務局（和歌山県立近代美術館）

委員委嘱

村田　弘	紀の川市文化財保護審議委員	26.04.01-27.03.31
村田　弘	名手本陣保存整備委員会委員	26.04.01-27.03.31
村田　弘	紀の川市河川整備委員	26.04.01-27.03.31

丹野　　拓	一般社団法人和歌山県文化財研究会那賀支部理事	26.04.01-27.03.31
丹野　　拓	関西大学文学部　非常勤講師	26.04.01-27.03.31
川崎　雅史	御坊市文化財保護審議委員	26.04.01-27.03.31
川崎　雅史	みなべ町文化財保護審議委員	26.04.01-27.03.31
結城　啓司	金剛峯寺境内（奥院地区）大名墓総合調査委員会	26.04.01-27.03.31

Ⅲ　講師派遣・執筆など

埋蔵文化財関係

丹野　拓・寺西　朗平「出前授業」　26.05.12　於：和歌山市立川永小学校

山本　光俊「和歌山市平井遺跡・平井Ⅱ遺跡の調査成果」考古学研究会関西例会第 191 回研究会
26.11.22　於：大阪市立港区民センター

川崎　雅史「遺跡からみた御坊」歴史文化遺産フォーラム御坊の過去・現在・未来
26.11.15　於：御坊市民文化会館

川崎　雅史「ここまで分かった！湯河氏の館」『きのくにの城と館　紀中の戦国史』和歌山県立博物館　26.04 発行

丹野　拓「紀伊における飛鳥・白鳳期の軒瓦の系譜と地域性」『考古学研究』第 61 巻第1号　考古学研究会　26.08 発行

丹野拓・藤藪勝則　「大谷山 22 号墳の形象埴輪―胡籙形埴輪の紹介と検討―」『紀伊考古学研究』第 17 号　26.08.31 発行

川崎　雅史「岩内 1 号墳についての一考察」『有間と宮子～御坊・日高に眠る古代史開眼』御坊市教育員会　27.03 発行

文化財建造物関係

結城　啓司　高野七口学「丹生都比売神社本殿保存修理工事－塗装工事における新発見－」
26.05.17　於：橋本市保健福祉センター

結城　啓司　かつらぎ町文化財研究会「丹生都比売神社本殿保存修理事業及び金剛峯寺中門再建事業の見学」
26.05.26　於：丹生都比売神社、金剛峯寺

多井　忠嗣・結城　啓司　平成のご造営「第二回特別見学会」　26.07.19-20　於：丹生都比売神社

多井　忠嗣　「見て知る伝統技術」　26.09.28　於：琴ノ浦温山荘園

結城　啓司　黎明館ナイトレクチャー「丹生都比売神社本殿の保存修理と新発見」
26.11.07　於：高野山大学

結城　啓司　世界遺産学習会「丹生都比売神社本殿の保存修理と新発見」　26.12.13　於：丹生都比売神社

結城　啓司　かつらぎ町歴史・文化講座「重要文化財　丹生都比売神社本殿　保存修理工事について」
27.01.18　於：かつらぎ総合文化会館

多井　忠嗣　和歌山県建築士会女性委員会「修理現場見学会」　27.01.24　於：琴ノ浦温山荘園

多井　忠嗣・結城　啓司　第 7 回いにしえの有田歴史講座「法音寺の歴史と文化」
27.02.28　於：岩倉公民館、法音寺

多井　忠嗣　「重要文化財琴ノ浦温山荘浜座敷ほか二棟　－近代和風建築と黎明期の工業製品－」『建築史学 NO.63』
26.08 発行

下津　健太朗　「重要文化財琴ノ浦温山荘浜座敷ほか二棟－現場紹介－」『文建協通信 NO.118』　26.10 発行

結城　啓司　「【特集】竣工 丹生都比売神社」『小西美術工藝社通信 Vol.6』　26.12 発行

Ⅳ　刊行図書・出版物等

年報

『公益財団法人和歌山県文化財センター年報 2013』　26.05.30 発行

埋蔵文化財課関係

調査報告書

『神前遺跡－秋月海南線道路改良に伴う発掘調査報告書－』　26.08.19 発行
『出塔の水道－山田川砂防工事に伴う発掘調査報告書－』　26.10.30 発行
『井辺遺跡、神前遺跡－都市計画道路松島本渡線（神前南）道路改良工事に伴う発掘調査報告書－』　26.10.31 発行
『立野遺跡－近畿自動車道紀勢線事業に伴う第２次発掘調査報告書－』　26.10 発行
『目座遺跡、八丁田圃遺跡、塗屋城跡、大古Ⅱ遺跡、稲成Ⅰ遺跡、安宅本城跡、田ノ口遺跡、岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡　－近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査報告書－』　27.01.09 発行
『立野遺跡－すさみ町公共施設移転事業に伴う発掘調査報告書－』　27.01 発行
『和田遺跡－秋月海南線道路改良工事に伴う発掘調査報告書－』　27.03.18 発行
『和歌山城跡－和歌山地家簡裁庁舎建設に伴う発掘調査報告書－』　27.03.25 発行

現地説明会資料

「立野遺跡」現地公開資料　26.07.19 発行
「川辺遺跡」現地公開資料　27.01.17 発行
「木津遺跡」現地説明会資料　27.02.08 発行
「根来寺遺跡」現地公開資料　27.03.05 発行

報告会・シンポジウム資料等

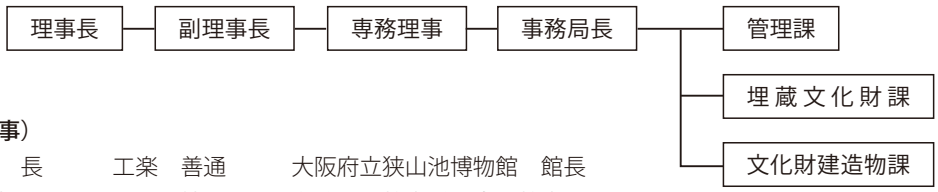
『地宝のひびき－和歌山県内文化財調査報告会－』資料集　26.07.13 発行
『歩いて知るきのくに歴史探訪～藤白神社から琴ノ浦温山荘園までを巡る～』文化財マップ　26.10.25 発行
公開シンポジウム『熊野三山の考古学－発掘調査から見た信仰の始まりと展開－』発表資料集　26.11.22 発行
公開シンポジウム『和歌山城と城下町の風景』発表資料集　27.03.08 発行
『和歌山県の文化財①かつらぎ町中飯降遺跡』埋蔵文化財発掘調査概要パンフレット　27.03.27 発行

埋蔵文化財と文化財建造物のミニ情報誌（公財）和歌山県文化財センター通信『風車』

第 67 号　特集「平井遺跡・平井Ⅱ遺跡の発掘調査」　26.06.30 発行
第 68 号　特集「重要文化財琴ノ浦温山荘浜屋敷の保存修理工事について」　26.09.30 発行
第 69 号　特集「平井遺跡第３次・第４次発掘調査」　27.01.30 発行
第 70 号　特集「木津遺跡発掘調査」　27.03.25 発行

Ⅴ　組織

組織図



役員（理事）

理　事　長	工楽　善通	大阪府立狭山池博物館　館長
副 理 事 長	西下　博通	和歌山県教育委員会　教育長
専 務 理 事	里森　　修	元和歌山県農林水産部水産局　局長
理　　事	櫻井　敏雄	元近畿大学　教授
理　　事	鈴木　嘉吉	元奈良国立文化財研究所　所長
理　　事	西川　秀紀	宗教法人東照宮　代表役員
理　　事	林　　宏	社団法人和歌山県文化財研究会　会長
理　　事	前田　孝道	宗教法人護国院（紀三井寺）　代表役員
理　　事	水田　義一	和歌山県立紀伊風土記の丘　館長

役員（監事）

風神　正典	税理士・風神会計事務所　代表
楠　　義隆	和歌山県教育庁生涯学習局　局長

評 議 員

市川　浩之	和歌山県立紀伊風土記の丘　副館長
井藤　　徹	日本民家集落博物館　館長
小野　俊成	宗教法人道成寺　代表役員
加藤　容子	元和歌山県教育委員会　教育委員
川端　真理	和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課　課長
佐々木公平	宗教法人広八幡神社　代表役員
千森　督子	和歌山信愛女子短期大学　教授
鈴木　晴久	和歌山県立博物館　副館長
山陰加春夫	高野山大学　名誉教授
和田　晴吾	立命館大学　名誉教授

職員

事務局長

嶋田　文紀

参　　与

村田　　弘

管 理 課

主　　査	松尾　克人
副　主　査	出口由香子
副　主　査	中野　一三

埋蔵文化財課

課　　長	井石　好裕
課 長 補 佐	土井　孝之
主　　任	佐伯　和也
主　　査	丹野　　拓
主　　査	高橋　智也
副　主　査	渋谷　高秀
技　　師	山本　光俊
任期付職員	川崎　雅史
任期付職員	寺西　朗平
任期付職員	森原　かおり（～ 26.8.31）
専門調査員	山野　晃司
専門調査員	小林　充貴（26.6.16 ～）

文化財建造物課

課　　長	多井　忠嗣
副　主　査	下津　健太朗
副　主　査	結城　啓司
技　　師	大給　友樹（26.10.01 ～）
技術補佐員	田村　收子
技術補佐員	松井　美香

表紙図案

表紙右上　和歌山城跡出土　黒釉鳥形香合
表 紙 下　熊野本宮大社神門・築地塀　正面図

公益財団法人

和歌山県文化財センター年報

2014

2015 年 5 月 29 日

【発行】

公益財団法人　和歌山県文化財センター

〒640-8301　和歌山市岩橋 1263 番地の 1

TEL　073-472-3710

FAX　073-474-2270

http://www.wabunse.or.jp/

E-mail　maizou-1@wabunse.or.jp

【印刷】

株式会社　協和

（公財）和歌山県文化財センター
http://www.wabunse.or.jp